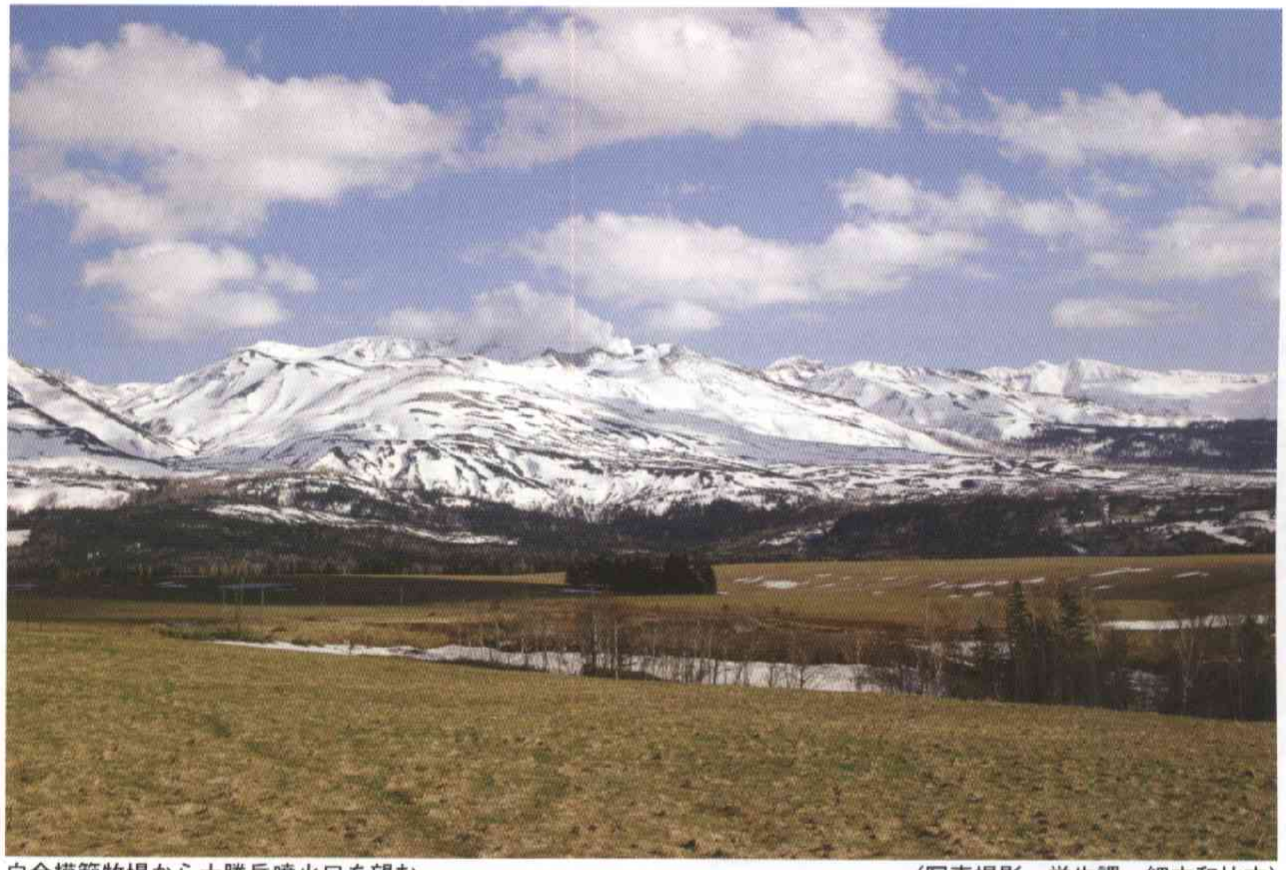
かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英　氏）

第117号

平成16年6月21日

編集　旭川医科大学
教務・厚生委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課



白金模範牧場から十勝岳噴火口を望む　（写真撮影　学生課　細木和比古）

新入生を迎えて……八竹　直…2
まだ何者でもない皆さんへ……中村　正雄…3
「リラの香」～新入生を迎えて……服部ユカリ…4
平成16年度医学科入学者名簿……5
平成16年度看護学科入学者名簿……6
平成16年度看護学科第3年次編入学者名簿……6
新入生を迎えて……水上　泰…7
新入生を迎えて……宮越　千晴…7
旭川医科大学に入学して……海野　茂樹…8
『僕と旭医。』……丸田　晃生…8
旭川医科大学に入学して……内村　有希…9
旭川医科大学に入学して……近藤　知哉…9
海外視察を終えて……鳥本　悦宏…10
サザンクロスに誘われて……今井　充…11
米国での海外視察を終えて……山口　聡…12
米国ＮＩＨ視察を終えて……田熊　直之…13
外国人留学生一覧……14
平成16年度大学院入学者名簿……14
新入生歓迎合宿が終わって……佐々木優花…14
東医体の運営に携わって……民谷健太郎…15
授業評価の公表……16
学生団体一覧……43
新入生合同研修会実施される……44
平成15年度学位記授与式……44
平成16年度入学式……44
第46回東日本医科学生総合体育大会……45
第47回東日本医科学生総合体育大会……45
教員の異動……46
窓外……山内　一也…46

新入生を迎えて

旭川医科大学長　八　竹　　直

入学者選抜の難関を突破し、本学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。私どもは心から祝福し、歓迎いたします。

病に苦しむ患者さんのために働こうという高い志をもって医師や看護師の道を選ばれた皆さんに深く敬意を表します。今後ともその志を大切にし、自分自身を切磋琢磨されることを願っています。

20世紀は非常な勢いで科学技術が進歩し、あらゆる面で効率化が求められ、物事を指標化や数値化して処理する傾向が大きくなりました。それによって色々な面で大いなる発展がもたらされました。しかし昨今ではこれらの行き過ぎによる歪が目立つようになり、やはり多様性が大切ではないかと考えられるようになってきています。

これは最近の医療の世界においても同じことが言えると思います。病気の原因検索や治療は多数の患者を対象とした科学的・統計学的厳密性の高い医学研究の成果に基づいて行う医療、すなわちevidence based medicine (EBM)が合理的であると考えられ、推奨されてきました。確かにこれによって患者さんが得る結果が最善のものになる可能性は高くなります。しかし医療者はややもすると数値化された指標のみを基に医療を行いがちになります。

一方narrative based medicine (NBM)という、患者さん自身の語りを重視した医療が重要であると言う考えが出てきています。narrativeとは「物語」とも訳されていますが、これは患者さん自身の言葉で話される苦悩などの精神心理面や個人個人の生い立ちや環境を医療者側が深く理解して医療を行うというものです。医療にとってEBMとNBMは対立するものではないものの、一人ひとりの患者に応じた全人的な治療をおこなうことの大切さ、多様なアプローチが再認識されたことによるものでもあります。

これらの多様性の考えは医学教育にも及んできました。今までのように画一的に多くを教え、学ばせるという従来の教授法から、学生が主体的に自ら学ぶ、いいかえると自分で課題を見出し、自分でそれを解決する力を身につけさせる問題解決型教育法に変わりつつあります。旭川医科大学でも医学科では平成11年度から早期体験学習、チュートリアル教育を中心とする新しいカリキュラムが開始されています。さらに平成15年度からは患者さんの診断、治療のチームに参加する臨床実習であるクリニカルクラークシップも採りいれています。看護学科も平成14年度からカリキュラムが改められ、看護技術の習得に重きがおかれています。これらの教育は学生にも教師にとっても当然努力のいる方法ではあります。しかしそれぞれ多様性のある勉強ができるという大きなメリットがあります。どうぞこれらの教育のメリットを充分活用して、自分の志を高めていってほしいと思います。

さて、旭川医科大学はこの４月１日から、国立大学法人旭川医科大学となり、あなた方はこの新制度での最初の入学生です。国立大学法人となって、大学は文部科学省の一行政機関ではなくなり、運営方法は大きく変化しました。しかしこの大学が国立大学であることに違いはありませんし、学生生活が前の制度と大きく変化することもありません。授業料も今年度は変えません。大学は６年間を目標に教育、研究、診療の各々を良くするための計画を公表しており、教育に関しても、目標・計画に則って教育効果が上がるように改善していく予定です。

この４月から教職員は大学の再出発に対し、新しい意気込みで仕事に取りくんでいます。どうぞ新入生の皆さんもわれわれと共に新しい大学を作るという気概を持って学生生活を送ってください。

最後に皆さんが本学において医学・看護学を存分に学ばれると共に人間性を高められることを心から念願しています。

平成16年４月９日

まだ何者でもない皆さんへ

医学科第１学年担当　中　村　正　雄

旭川医大に赴任して初めて学年担任した諸君が、昨年卒業しました。この学年はいわゆる旧カリキュラムに属し、入試方法は前期と後期日程のみの時代でした。私の専門は生化学ですが、赴任して担当した授業科目は化学で、物理化学の分野を通年２単位分講義していました。20年以上前に学んだ無機化学や熱力学を、再び学びながら講義をしました。自信のない箇所の説明になると冷や汗をかきながら説明したことを覚えています。現在にくらべ旧カリキュラムでは、自然科学の基礎科目に充分時間が割り当てられる利点がありました。たとえば２年生になると化学、物理、生物の実習のほか自然科学特別実験が実施されていました。これらには実験のテーマごとにレポート作成が課せられ、そのレポートも添削するなど細かい指導が可能でした。私の講義は自身の専門から離れていましたが、時間を十分かけることができたせいか、比較的わかりやすいとの評価を得ていました。化学、物理の基本概念は時間をかけないと理解しにくいところがあります。その後、旭川医大は、新カリ、新新カリと２度のカリキュラム改革を実施しています。狙いは５，６年生の臨床実習を充実させるための時間の確保、それにコアカリキュラムの確立でした。コアカリキュラムは、全国の医学部で教えるべきミニマムの内容を精選し、これを医学生すべてにもれなく履修してもらうことにあります。当然これがミニマムですから、このほか医学に付随した必要な事柄を学習します。背景には、医学と密接に関連した生命科学の急速な進展があり、これに対応しようとするものです。具体的な学力のチエックには共用試験が臨床実習前に実施されます。御存じのように先進国では４年生の大学からメデカルスクールを経て医師となるコースが主です。この先進国のメデカルスクール入学時の学生に比べ、日本の医学部同世代の学力にあきらかな差がみられるデータがあり、これを克服しようという追い風もありました。私の留学先はアメリカの医科大学でしたが、そのメデカルスクールの学生の態度や意欲には目を見張るものがありました。

旭川医大の改革はこれまでの教養教育についやす時間を大幅に圧縮する結果になりました。私の担当する講義と実習は自身の専門に近い内容となりました。しかし新新カリで生命科学にひと括りされた共通科目はこれを構成している様々な個別の分野の寄せ集めです。生命科学の授業評価にしばしば講義内容のつながりがわからないとの指摘を受けますが当然なことです。私の専門の生化学は、学生の頃に比べ知識の増加と新しい発見に驚くばかりです。たとえばある生化学のテキストの厚さは、改定を続けた結果当時の２倍にもなっています。私たちが大学の専門課程で学んだことが、今では皆さんが学んだ高校の生物のテキストに載っています。ところで、皆さんが学ぶ生命科学の多くの分野、特に分子生物学の知識はすぐに新しい治療法に結びつく可能性をひめています。私たち教える側が講義内容を絶えず整理し重複をなくすこと。一方で、皆さんは理解した内容を全体像としてまとめる必要があります。その努力を怠るとひどく断片的で危険な知識となる可能性があります。分子生物学の進展の先が不安を持って語られることが良くあります。個人の遺伝情報の解読から個人の疾病の可能性、環境因子に対する感受性が推定され、これがあらたな差別につながる可能性もあります。したがって卒業後も新しい生命科学の知識を正しく取り入れる必要があります。

皆さんが取り組むべきカリキュラムの変遷を簡単に述べてみました。皆さんがたった一人で患者の方と向きあう時がすぐにきます。その時皆さんが、何を身に付けていなくてはならないか、今後も想像力をたくましくめぐらし続けることは大切なはずです。

（化学　教授）

「リラの香」～新入生を迎えて

看護学科第１学年担当　服　部　ユカリ

今年は、入学式が終わったというのにまだ雪が舞うことがあり、冬がいつまでも居座って、ほんとうに春の訪れが待ち遠しく思われました。新入生の皆さんには道内出身者が多く、その人たちにとっては冬の長さは当たり前のことかもしれませんが、新参者の私には些か苦痛だったというのが正直なところです。学内の木々の枝先がうっすらと薄黄緑色に見え始めた時は、心底ほっとしたものです。

「近からむ雨の気配は庭木々のつのぐむ気配　リラの香匂う」という頃が私の一番好きな季節です。ところで、この歌は道浦母都子さんの「青みぞれ」という1999年に短歌研究社から出版された歌集に採られているものです。私と短歌との出会いは、（と言っても、残念ながら自分で歌を詠むわけでも、知識があるわけでもありませんが）かつて、在宅介護支援センター（看護職と福祉職が協同して高齢者の様々な相談やサービス調整などにあたる機関－現在は役割が少し変わっています）で保健師として働いていた時に遡ります。

その時出会った、難病を患っておられる70代のＫさんが、後になって知ったのですが国文学の元教授で短歌界のリーダーのお一人でした。お会いしたときは、車椅子生活で筆記用具はすでに使えず、歌はパソコンに指１本でポツ、ポツと一文字、ひと文字、入力されている状態でした。それでも、所属しておられた短歌会誌に毎月必ず寄稿され、その後「今も心に重くのしかかっている」戦争を詠った歌集を上梓されました。その頃の歌に「ページを繰ることの難くもなりたればにくしみの対象と本もなり行く」（まひる野, 49-5）があります。

歌に注がれる情熱と不自由なお体で努力を続けられる姿に打たれたことと、Ｋさんが歌を詠むことを熱心に勧めて下さったことから短歌に関心を持ちました。申し訳ないことにその後、大学の教官となり転居し、Ｋさんと接する機会がなくなるにつれ創作から遠のいてしまいましたが、短歌への関心は残り、先の道浦さんと先年92歳で逝かれた斉藤史さんの歌が私の怒り、不安、悲しみや言葉に表せない闇の暗さを、和らげてくれるので、折にふれ歌集を開いています。

さて、平成15年度には看護系大学が全国で100校を超えました。本学は設立の早さで言うと28番目です。このように大学が増加している理由の一つは、より質の高い看護が実践できる看護職者を養成するということです。大学で看護学を学ぶということは、経験則ではなく、理論に基づいた知識や技術を体系的に学習し、実践できる能力を養うということです。

もう一つは、豊かな人間性を育むということです。それは教養を深めると言い換えても良いでしょう。専門分野の見識は抜群だけれど他分野のことや社会常識には疎いという研究者もいますが、専門分野の能力は極めて高く優秀な研究者や臨床家で、しかも他分野についても造詣が深い人が大勢います。看護職者は、「健康と病いに対する人間の経験と反応」に関わるものですから、専門分野の見識のみならず他分野についての教養が大切です。また、それが専門分野の能力にも良い影響を与えます。

私の場合は短歌にしても決して教養といえるものではなく、良い例になれないことが残念ですが、新入生の皆さんが看護のことばかりでなく、色々な分野に目を向けるきっかけになればと思い、敢えて私のことを書きました。広い視野で大学時代に幅広い教養を身につける芽を育てて欲しいと思います。「花季長きクリスマスローズのやわら花二十歳のわれにもう戻れない」（道浦母都子、同上）と思う日が来るまでに。

（看護学　教授）

平成16年度 旭川医科大学入学式
医学科

平成16年度 旭川医科大学入学式
入学式次第
一 開式の辞
一 学長式辞
一 学長式辞
一 祝辞
一 閉式の辞
以上
看護学科

新入生を迎えて

医学科第６学年　水　上　　泰

新入生の皆様、御入学おめでとうございます。勉強、遊び、部活、アルバイト等、多くのことを考えているとは思いますが、いずれにしても高いモチベーションを持っていることでしょう。そして６年間は長いと考えているでしょう。私もそう思っていました。しかし、４年が終わると、５年目からは病院実習が始まり忙しくなり、案外早いものです。

私は入学時、バスケ部に入部しましたが、早々に退部してしまいました。理由は、バスケットボールをやったことがなく、単純に興味本意で入ったのが悪いのかもしれませんが、練習が大変なこととその時間を他の事に費やそうと考えたからです。１年後には卓球部に入部し、やはりバスケットボールをしたいと思い、ばすけ同好会を立ち上げました。また、旅行やアルバイトにも時間を費やしました。と同時に、多くの無駄な時間も過ごしてしまったかもしれません。しかしこうした無駄な時間を過ごせるのも、学生時代の特権であって、必要善であると思います。一方、本当に無駄な時間を認識することで、時間の大切さを理解することもできるのではないのでしょうか。

残り１年弱で私も医師として働く予定です。時間的に余裕が持てる診療科もありますが、内科・外科系を専攻するとなると、自由な自分の時間を持つことは難しいと思います。部活のように何か１つの事に取り組むことも、非常に有意義かとは思いますが、将来、私たちは医師という１つの職業に取り組むのですから、今のうちに様々なことに挑戦してみるのはいかがでしょうか。病気は患者様が教えてくれるのであって、それを知るためには知識以外に、コミュニケーションが大切だと思います。様々な経験と活動で、様々な種類の人たちと接する事で、豊かな人間性を得ることとなり、それが患者－医師間の良好なラポール形成に結びつくと考えています。６年間の使い方は、千差万別ではありますが、卒業時に充実したと思える６年間を過ごしてください。

新入生を迎えて

看護学科第４学年　宮　越　千　晴

新入生の皆さん入学おめでとうございます。入学時，皆さんの心の中はこれから始まる大学生活への期待や不安といった様々な感情があったことと思いますが、大学生活には慣れてきたでしょうか。大学生活は、これまでの学校生活とは異なり、自主性が大切になってきます。看護という専門的な分野を学んでいくうえで、講義だけでは足りないことがたくさんあります。そんな時、どれだけ主体的に勉強できるかによって自分を成長させる力が変わっていくと思います。私自身、学年を重ねるたびに覚えなければならない知識や技術が増え、「あの時もっと勉強しておくべきだった」と後悔したことがあります。１年生の知識は、看護を行ううえでの基本的な内容が多く、その内容をしっかり理解し自分のものにすることが今後の実習等で必ず役に立っていくと思います。ですから、講義を理解していくことはもちろん、興味をもったことからどんどん知識を広く深くしてほしいと思います。

本学では他の学年や医学科の人たちとの交流は部活動やサークル活動が主になることと思います。学校生活での悩みについて相談できる先輩がいることは大変心強いことであり、自分とは違う科の情報を知ることもいい勉強になると思います。

また、学内の生活だけではなく学外の生活でもアルバイトといった社会経験をしてみるのも、将来に向けての勉強になり、役立つことが多くあると思います。私自身、大学に入って初めてアルバイトを体験しましたが、看護とはかけ離れた仕事でも全て将来に結びつく貴重な経験をすることができたと思っています。

４年間という大学生活はあっという間に過ぎていきます。その間に楽しいことや嬉しいことだけではなく辛いことや苦しいこともあります。しかし、それらを乗り越えていく力を誰もがもっていると思いますし、乗り越えていったときに自分の成長を実感できると思います。多くの人と交流し、様々な経験が積めるような充実した学校生活を送って下さい。

旭川医科大学に入学して

医学科第１学年　海　野　茂　樹

私にとって、この旭川医科大学で過ごすこれからの６年間は２回目の大学生活となります。以前は法学を学んでおり、まったく違う分野の学問である医学を改めて学ぶことについてはやはり不安もありました。加えて、高校を卒業してすぐに入学してくる人たちとはずいぶん年齢的な開きもあり果たしてうまく人間関係を築いていけるのか、体力や気力の面で途中でついていけなくなったりしないのかなどいろいろな不安を抱えての入学でした。

しかしいざ入学してみるとそこには自分と同じように、もしくはそれ以上にいろいろな経験を経て旭川にやってきたという人たちが一年生に限らず先輩方にも多くいて、これならば自分もどうにかやっていけるのではないかと少し安心したことを覚えています。また、最初はお互いに遠慮やぎこちなさはあったものの、入学から２ヶ月たって歳の離れた同級生たちともだんだんと馴染むことができてきているように思います。

前述のように私は一度大学を卒業しており、多少は経験をつんできたと思っています。これから医学を学ぶにあたって、またその後医師として医療に携わるときにそれらの経験を生かせるようにということを常に意識しながら、一方で自分はこの世界ではまったくの初心者であるということを忘れずに日々の勉学に励んでいきたいと思っています。また、これからの生活でもし自分がその経験を生かして誰かの助けとなることができるならそのときはできる限りの力を尽くし、自分が誰かに助けてもらうときにはその助けに対する感謝を忘れずに生きていけるようになりたいと思っています。

最後に、もう一度こうして大学で学びなおすことを許してくれた父母に感謝し、将来社会に貢献できる医師となるべく努力することを誓ってこの文を締めくくりたいと思います。

『僕と旭医。』

医学科第１学年　升　田　晃　生

僕は小学生の頃から医師に憧れておりました。そして将来は我が故郷である礼文島のような離島で、人々と温かく触れ合いながら最先端の僻地医療を実践していきたい、というのが今の「夢」であります。その夢を叶えるべく旭川医科大学を志望校にすることを決意しました。なぜなら旭川医大の教育理念や教育方法が自分の理想とする医師に限りなく近いからです。自主的に多くを学び感じることができる早期体験実習、自学自習の態度・コミュニケーション能力・その他医師に必要な要素が凝縮されたチュートリアルの授業、まだまだ僕達学生に求められるものを丁寧に伸ばし指導してくれる教育システムが日々構築されつつあります。医師を志す学生のことを考えた非常に教育熱心な大学であると僕は強く感じています。しかしここで言って置かなければならないのが、旭川医大は勉強だけではないということです!!部活動に熱中できるのも一つの特徴といえるでしょう。僕はバレー部に所属しておりますが、最近では北海道の中の大学で２部リーグ昇格という快挙を成し遂げた、今一番波に乗っている部であります。日々の練習はハードですが仲間と励ましあい、至らないところは尊敬する先輩達が優しく指導してくれる、楽しく充実した超体育会系クラブです。僕は高校時代のときとポジションが変わり一からのスタートではありますが、多くの先輩による精神面のフォローのお陰で、日々の成長が自分でも感じられます。旭川医大の部活動は医師になるための、講義では補えない多くのものを満たしてくれているように思います。それはバレー部だけではなく、他のクラブでも当然言えることです。

ここでは様々な考え、そして「人を救う」という同じ「志」を抱いた仲間や先輩が沢山います。チューハイ片手に語り合ってみると、非常におもしろく興味深いのです。色んな人と話をしながら学び、ちょっとずつ自分の思い描く『医師』になっていこうと思います。６年間の旭川生活、始まったばかりではありますが期待と期待と期待で胸がいっぱいです!!頑張るぞ～～!!よっしゃ!!

旭川医科大学に入学して

看護学科第１学年　内　村　有　希

合格発表の日、掲示板に自分の受験番号を見つけた時から、旭川医科大学に入学することを楽しみにしていました。高校生活とは違う、充実した楽しい大学生活を思い描き、期待に胸を膨らませて入学式を迎えました。校門から玄関までの道に、大勢の先輩方がいて、新入生を囲んでいました。部活の勧誘をされ、先輩と一緒に写真を撮ったり、たくさんの勧誘の紙をもらったりと、玄関にたどりつくまで、圧倒され続けました。入学式の次の日に行われた１泊２日の新入生歓迎合宿では、すごい盛り上がりに驚きつつも、楽しく過ごすことができました。新入生歓迎合宿のおかげで、新しい友達ができ、部活の先輩方とも仲良くなることができて、新しい大学生活への緊張や不安がなくなったように思います。

今、入学してからの１ヶ月を振り返ってみると、慌しくあっという間に時間が過ぎてしまったように感じます。思っていた以上に、高校生活とは違う大学生活に、自分を適応させることに必死になりました。大学で学ぶということは、自らが進んで勉強しないといけない、ということを実感させられ、少し甘く考えていたことに反省しています。しかし、講義の内容は難しいけれども、将来、看護職に就くために、必要であるし、大切なことでもあるので、関心や向上心を持って学んでいきたいと思います。部活にも入部し、先輩や同じ１年生の仲間に恵まれて、とても楽しく活動しています。先輩・後輩の親密なつながりがあるおかげで、不安や悩みがあれば相談でき、豆知識を教えてもらうこともできます。そう考えてみると、この１ヶ月はとても充実した時間だったように思います。

これから、４年間看護学を学んでいく上で、自分がどれだけ成長できるのかわかりませんが、いろいろな知識を得て、適切な判断力や責任感、コミュニケーション能力など、さまざまなことを伸ばしていくことができるように努力したいと思います。

旭川医科大学に入学して

看護学科第１学年　近　藤　知　哉

「合格」という二文字を目指し、熱心に頑張った受験勉強。無事に目標を達成し、旭川医科大学の学生の一員となることができ、元々、医療の現場に興味を持っていた僕にとって、そのことは本当に嬉しい限りでした。しかし、嬉しさの反面、地元から離れて何もかもが新しいこの環境の中で、一人で生活していかなければならないことに、一筋の不安を感じていました。

様々な感情を内に秘め迎えた入学式。学校へと一歩踏み出した途端、大勢の先輩方が一気に押しかけ、部活の勧誘をされました。その勢いを直に受け、僕は驚くことしかできませんでした。そしてその翌日には、いきなりの新歓合宿。出会って間もない仲間との突然の合宿をすることに、驚きを感じると同時に、大学生の雰囲気を体験することができ、僕は大学生活を送れることへの感動を実感できました。

入学してからこれまでの間、大学生として過ごすための大切なことを学びました。一つは掲示板の大切さです。大学での連絡事項は先生が口頭で言うのではなく、全て掲示板に貼り出されていて、それを自分自身で見て確認しなければいけません。そして、授業の質も自分の想像とは違い、専門的な用語がたくさん飛び交います。その中で、予習復習の大切さを身に染みて感じました。今までの自分の学習に対する積極性のなさを深く感じ、自分から率先して学ぶ努力を持ちたいと思います。

そして、看護職を志すにあたって重要なことは人との接し方だと思います。
患者のことを少しでも理解するためにも、その能力はとても大切なものです。その為にもまず僕は、今いる同級生や先輩とより親密になれるようにしたいと思います。それがより快適な大学生活を送れるし、その能力を伸ばすことになるでしょう。そして卒業した時には立派な看護師になりたいと思います。

海外視察を終えて

第三内科　講師　鳥　本　悦　宏

我々3人（大槻伸子；9階東看護師長、猿田智子；総務課企画係、と私）は、平成16年3月14日から20日の日程で米国ペンシルバニア州Hersheyの、Hershey Medical Center（ペンシルバニア州立大学）とNew York CityのMontefiore Medical Center（Albert Einstein医科大学）の２つの病院を見学する機会を得た。成田を出発後、快晴のワシントンDCに到着した。半袖の人も見られるポカポカ陽気の中、ホワイトハウス、博物館などを見て回った。翌日は、前日の好天がうそのように朝から雪で、ハーシー行きの飛行機が欠航になるのではと心配しながら空港へ向かった。同時多発テロ以来の厳しいボディチェックで、上着を脱ぐのはもちろん靴まで脱いで、更には、一人一人個別にチェックされてようやく飛行機に乗り込んだ。

ハーシーには、第三内科から留学中の斉藤浩之先生が迎えに来てくれほっと一息を着いた。有名なハーシーチョコレートの工場とそれに近接した大きな遊園地、そして、Hershey Medical Centerが際立って目立つ。病院の規模や学生数など旭川医大とほぼ同じで、現在本校と姉妹校の話があり毎年学生の交流を行っている。大学内をHumanityという講座のWilson先生と看護学科のFisher先生に案内していただいた。世界で初めて臨床応用された人工心臓の展示や、祈りを捧げられる場所がそれぞれの宗教に応じて用意されていることなどに感心させられた。また、遠方で研修中の学生が、双方向のカメラやモニターを用いて講義やカンファレンスができるようなシステムや、コンピューターによって種々の心雑音を作成できる実習用の人体モデルなど、学生教育に対する充実した設備を見学させてもらった。私の専門領域である血液・腫瘍の病棟も見学させていただいたが、造血幹細胞移植の患者を含めても平均在院日数は2週間ということであった。このような入院期間の短縮を可能にしているのは、抗生剤や抗がん剤の投与、輸血などを、外来施設あるいは病棟内にある日帰り用のベッドで施行されていることによる。骨髄抑制で感染症を併発した場合や、強い副作用で通院不可能になった場合などしか患者は入院せず、多くは、病院周辺の安い宿泊施設から通院してくるとのことであった。その夜は、斉藤先生の留学先のボスであるDr Chorneyのお招きで、奥様の手料理をご馳走になった。アメリカ人家庭の文字通りat homeな雰囲気を味わうことができた。

翌日はニューヨークへと移動し、Montefiore Medical Centerへ向かった。ここでは、血管外科を専門とされている大木隆夫先生に外来・病棟を案内していただいた。大木先生は日本の医学部を卒業後、アメリカに渡り、無資格、無給で研修を続け、ついには、この病院の血管外科を担当するまでなった努力家の先生である。ここでは、患者は、手術当日、外来からそのまま手術室に入り、術後病棟に上がるというシステムで、大血管の手術を含めても平均的な入院期間は一週間ほどということであった。患者の大部分はニューヨーク以外から来ているが、術前検査はほとんど地元の病院で行われ、遠方から何度も外来に通ってくることはない。広域な医療圏を抱える旭川医大にとって参考になることではないかと思う。

今回は、アメリカでの滞在期間が4日間と短い割には移動が多く、朝早くから空港へ行かねばならず体力的にきついスケジュールであったが、2つの病院をじっくりと見学できたほかにも、ニューヨーク市内観光やミュージカル鑑賞、食事などで毎晩遅くまで充実した時間を過ごすことができた。幸い同行者にも恵まれ、楽しい海外視察となった。このような機会を与えていただいた八竹学長および関係各位に感謝申し上げます。

サザンクロスに誘われて

熱田　裕司（整形外科　講師）、浅野　　泉（図書課）、今井　　充（整形外科　技術専門職員）

諸般の事情により私達三人は、海外の医療施設視察先としてオーストラリアのシドニー病院を選び、水曜出国・日曜帰国（3/24～28）という超ハードスケジュールを敢行して参りました。視察旅行の目的を直接的な医療施設の視察だけではなく、南半球に位置するオーストラリア（国旗に南十字星）そのものとそこに住む人々のhospitalityという視点から眺めてみることにしました。出発に先立ってまず成田で両替したところ、オーストラリアのお札は紙幣ではなく、ポリマー弊（寿命が５倍くらい長いそうです）であり、そのカラフルさと手触りは紙幣のそれではなく、これから異国に旅する弾む気持ちのせいか、アミューズメントパーク限定のお札という印象でした。1A＄=75～85円。日本から9時間半のフライトの末、シドニー空港に降り立ち、まずは今回の視察先であるシドニー病院を訪れました。病院はシドニーの中心部にありオーストラリアで最も古い病院です。1788年当時イギリスの軽犯罪者が刑罰として軍隊とともにこの国に送られ、その時、病人の治療のためロックス地区にテントが張られたのが始まりとのことです。病床数113床、職員数500人(内看護師90人)、4病棟、６つのオペ室を持っています。業務内容として救急外来は24時間体制を取っており、シドニーの住人、市内に勤務している人、観光客、ホームレス、すべてを対象としていますが、ICUがないため、重症患者については、ある程度病状を安定させ他の病院に搬送しています。写真は病院前で撮影したものですが、イノシシの鼻に触ると願い事がかなうそうです。私はもちろん“世界平和”を祈りました。そのほか今回訪れたポイントのいくつかをご紹介します。シドニーのシンボルと言えば、まずオペラハウスがあげられるでしょう。そのユニークで優雅な外観は三方を海に囲まれた素晴らしいロケーションにとても良くマッチしており、訪れた者をほっとさせます。シドニー郊外にある動物園では、カンガルーが園の中をピョンピョン跳ね回っていましたが、コアラは眠そうな目をしてユーカリの木に抱きついていました。ご存知のようにコアラはユーカリの葉しか食べません。ユーカリは栄養価が少ないので、出来るだけエネルギーを使わないように、昼間はもちろん１日20時間くらい寝るそうです。以前は希望者の胸で記念写真も可能だったようですが、ストレスのため早死にするコアラが続出したため、来園者がコアラを抱くことは法律で禁じられたとのこと。ストレスに悩むのは人間だけとは限らないようです。オーストラリア博物館は、人類学、生態学、鉱物学、オーストラリア固有の動物や文化に関する展示が充実しています。中でも私の目を惹きつけて離さなかったのは、ヒトを含む脊椎動物の骨格の展示です。魚類、鳥類、哺乳類の精巧な標本が単に並べられているのではなく、色々な種類の骨格の組み合わせにより、そこにストーリー性を感じさせるインパクトのあるものでした。ここ数年本学の「大学案内」表紙デザインを担当している私にとっては特に印象深いディスプレイでした。例えば、ボーン・レンジャーという馬にまたがったヒトの展示（馬も人間も骨）は、1960年代に日本でも人気を博したアメリカのテレビドラマ「ローン・レンジャー」を洒落た展示です。ひょっとすると、次回の「大学案内2005」に登場するかもしれません。

旅行中一番うれしかったこと：夜でも身の危険を感じることなく、現地の方の対応が非常に心地よかったこと。(good hospitality！) 一番困ったこと:成田の税関を抜けたところで時計をみたら、羽田からの千歳最終便まで１時間しかない。リムジンバスでは間に合わない。そこで成田から羽田までタクシー。法定速度を遙かに○えるスピードでぶっ○ばしてもらい・・・間にあいました。今回の慌ただしい旅行を象徴するようなラストシーンでした。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった八竹直学長はじめ関係各位に深く感謝申し上げ、報告とさせていただきます。(今井)

米国での海外視察を終えて

泌尿器科学講座　講師　山　口　　聡

この度、私たち３名（集中治療部　藤巻智子看護師長、学生課　野寺政和事務官、泌尿器科　山口　聡）は、平成15年度「在外研究員等旅費による派遣」の第３グループとして、平成16年３月13日から19日まで、米国の医科大学および医療施設を訪問する機会を得ましたので、その結果につきご報告させていただきます。派遣先は、ウィスコンシン州ミルウォーキー市にあるMedical College of Wisconsin (MCW)とその関連施設のFroedtert Memorial Lutheran Hospital、Human and Molecular Genetics CenterおよびVeterans Affairs Medical Centerでした。

Froedtert Hospitalでは、Stephen W. Hargarten教授の案内により救急部を視察しました(写真)。救急部は一般病棟とは全く独立した棟にあり、内部はさらに一般成人と17歳以下の小児部門に分離していました。救急患者が来院すると、まず専門教育された看護師等によりトリアージがなされます。トリアージとは患者の緊急度や重症度によって治療の優先順位を決めることで、災害等を常に意識した体制がとられていました。救急車は1日20-30台を受け入れ、周辺100mile（160km）以内の搬送はドクターヘリを使用することが多いようでした。別室では、救急車やヘリの連絡専門官が、常に数台のモニターにより、主要高速道路の渋滞や事故状況を監視しており、さながら交通情報センターのようでした。救急処置室にはICUとCCUが併設され、さらにCTなどの検査室が隣接することで、極めて機能的に構築されていました。ただ周辺の医療機器については、日本のものが優れている印象を強く持ちました。

次いでMCW本部にあるStudent Affairs Officeを訪問しました。案内役をかってくれたDr. Kenneth B. Simonsは臨床医から、この部門の責任者に転じた人で、学業に関することはもとより、就学資金から生活全般に至るまで幅広い相談窓口となって、多くの学生から慕われていました。MCWの学生数は4学年あわせて約800名で、OSCEやClinical clerkshipを含めたカリキュラムの策定には毎年かなりの時間を費やしているとのことでした。一方で、MCWは医科大学としての歴史が浅いことから、周辺の大学との過酷な競争を強いられており、ホームページやパンフレットの充実をはじめとした宣伝活動にも多くの力を注いでいました。これらの努力により、最近では飛躍的に入学希望者が増加し、加えて修士・博士課程には約700名が所属、卒後臨床研修医師についても関連施設を含めた総計では700名近くが確保されているとのことでした。

Human and Molecular Genetics Centerは、1997年に新築されたMCW基礎研究部門の中核であり、ここでは泌尿器科研究部門の主任として活躍中のDr. Iwamotoの研究室を訪問しました。日本人である彼とは本音を交え、米国での研究事情を詳細にうかがい知ることができました。特に事務部門が完全に独立していることで、研究者はNIHなどへのgrant申請や特許にかかわる手続きなどの煩雑な事務処理に一切煩わされることなく、研究に没頭できることが強調されていました。一方、米国では研究資金獲得の競争が凄まじいこと、資金がなければ給与は支払われず、すぐに研究室は閉鎖されてしまうなどの大変厳しい面も示されました。

最後に訪問したVeterans Affairs Medical Centerは連邦政府の施設であったこともあり、9-11のテロ以降、警備が非常に厳しく、物々しい雰囲気でした。ここは私が1999-2000年に所属した機関でもあり、副所長のNeil S. Mandel教授と再会し、尿路結石症に関する米国の基礎研究の最先端と、私たちが現在、行っている研究についての意見交換を行うことが出来ました。

ウィスコンシン州は、北海道とほぼ同じ北緯42～47度に位置し、米国では「酪農王国」として知られています。またミルウォーキー市は、ビールのMiller brewing companyやバイクファンには流涎もののHarley-Davidson companyの本社がある街としても有名です。3月は、まだ風が冷たく寒い時期でしたが、突き抜けるような青空と美しく真っ青なミシガン湖の風景にはしばし目を奪われました。また今回の訪問では、途中、21期の相沢　圭先生（麻酔科から研究留学中）にも同行いただき、13期の坂爪　悟先生（独協医大から出向）ともお会いする偶然もありました。遠く離れた地域で、複数の同窓生と会うことができた巡り合わせに驚きつつ、帰国の途についた次第です。

このような貴重な機会を与えていただいた関係者の皆様には、この場をお借りして深く感謝の意を表します。有り難うございました。

米国ＮＩＨ視察を終えて

周産母子センター　助教授　田　熊　直　之

「ハワイ大学を視察しましょうか？発生生物学で有名なラボがあるんですよ」。「ハワイですか、水着や浮き輪も必要ですね」。というようなバカンスの夢を、私と放射線部の西部先生と医事課の鹿島嬢の３人は頭の中で描いておりましたが、とある大学上層部より、「そんなのだめに決まっているだろう」。とのクレームが付き、今回我々は世界最大の医学研究施設であるＮＩＨ（米国国立衛生研究所）の視察に行ってまいりました。ＮＩＨは私がまだ大学院だった時に研究生活を送っていたところで、ワシントンＤＣ近郊のベセスダにあります。ＮＩＨは日本での厚生労働省に近い国家機関で、敷地内にビルが濫立し、今でもビルが増殖し続けております。アメリカの強大なパワーを感じます。主には医学研究ですが、最先端の医療を秘密裏（噂）に行なうクリニカルセンターも併設されています。今回の我々の主な目的は西部先生の専門である放射線診断治療施設の視察と現在ＮＩＨに留学中である産婦人科医局員達の研究進行状況の確認です。

３月中旬、渡米前前日：現在ＮＩＨにはＮＣＩ（癌分野）に加藤育民先生（14期）、ＮＩＣＨＤ（小児発達分野）に和田恵子先生（18期）が留学しています。今回の私の個人的な目的として、彼らへの緊急救助物資の搬送があります。そこでベストムでお買い物です。スーツケースの片側半分は食料スペースとしました。現在、日本からアメリカへの食料の個人郵送は厳しくなっており、彼らからＳＯＳが発信されていました。

米国入国：最近、テロの影響で米国への入国審査が厳しくなっております。預ける荷物には鍵をかけてはいけないだとか色々うるさくてかないません。しかも怪しげな人は靴まで脱がされます。私はすんなりでしたが、他の二人は結構怪しく見られるのか、靴脱がされたみたいです。ワシントンダレス空港には加藤先生と和田先生がそれぞれ愛車のリムジン（ＴＯＹＯＴＡ）で迎えにきてくれていました。というより、迎えに来るように予めきつくメール通達しておりました。「来ない奴には辛子明太子あたらんぞ！と」。空港から少し寄り道してホテルに着くなり、留学生達の食料品争奪戦が始まり、彼らの日本食への飢えを感じました。一方我々視察団は、その後、以前私が住んでいた時には貧乏で一度も行けなかった居酒屋タコグリルに行き、時差ボケ解消と親睦を深めるため、楽しく深酒してしまいました。

視察：さて視察は放射線部のＤｒ．Ｐｅｔｅ Ｃｈｏｙｋｅというナイスガイの偉い医師が案内してくれました。私はそちらの分野は全くの素人ですので、詳しい情報が知りたい方は西部先生にお訊ね下さい。臨床と研究が常に一体になっており、その環境はとても羨ましく思いました。ラボラトリー訪問の方は、私が以前いたラボでは、大ボスと数人の知り合いとお話ししてきました。そこは発生学のラボですが、現在は遺伝子治療なども模索しているようです。加藤先生のところのボスは新進気鋭の中国人女性で、非常にはきはきと英語を話すボスです。研究は甲状腺主体で、ホルモンレセプターに関する研究や、発ガン転移モデルマウスを使用して研究しています。和田先生は、ＧｎＲＨ neuronに関する研究が主体です。そこの小ボスが言うにはいい論文が出そうとのこと。その他、知り合いのラボなどを訪問し、実験機器と研究テーマの情報をいただきました。肺形成や肺炎喘息などの関連遺伝子を解析している興味深いラボがあり、コラボレーション及び今後のポスドク派遣に関しても検討してきました。

観光：紙面上の都合で省かしてもらいますが、加藤夫妻が寸暇を惜しんで、色々案内してくれました。もちろん夜のレストラン巡りやＮＢＡ観戦も。最後になりましたが、このような機会を与えていただいた八竹学長を始め関係諸氏に感謝申し上げます。

外国人留学生一覧

平成16年度４月１日現在の外国人留学生は大学院学生７名、学部学生１名の合計８名です。

氏　　名	通　称	性別	国　籍	種　別	期　間	専　　攻
HAO,YAWEI(趙　亜薇) チョウ　ヤーウィ	チョウ	女	中　国	大学院博士 第４学年	2001. 4. 1～ 2005. 3. 31	細胞・器官系
ZHAO,CHUNLEI(趙　春雷) チョウ　チュンレイ	チョウ	男	中　国	大学院博士 第４学年	2001. 4. 1～ 2005. 3. 31	細胞・器官系
WANG,GUOLI(王　国丽) ワン　グォリ	ワン	女	中　国	大学院博士 第３学年	2002. 4. 1～ 2006. 3. 31	細胞・器官系
MAMUTI,WULAMU(馬木提 吾拉木) マムティ　ウラム	ウラム	男	中　国	大学院博士 第３学年	2002. 4. 1～ 2006. 3. 31	生体防御機構系
XIAO,NING(肖　　寧) シャオ　ニン	シャオ	男	中　国	大学院博士 第３学年	2002. 4. 1～ 2006. 3. 31	生体防御機構系
SATO,MARCELLO OTAKE サトウ，マルセロ　オオタケ	マルセロ	男	ブラジル	大学院博士 第２学年	2002. 4. 1～ 2006. 3. 31	生体防御機構系
JANG, SEONG JAE(張　成宰) チャン　ソンチェ	チャン	男	韓　国	大学院博士 第２学年	2004. 4. 1～ 2007. 3. 31	生体防御機構系
KHALILATI BARIZAH ハリラティー　バリザー	エラー	女	マレイシア	医学科 第６学年	1999. 4. 1～ 2005. 3. 31	

平成16年度　大学院入学者名簿

博士課程

氏　　名	専　　攻	研究指導教員
宮　腰　昌　明	細胞・器官系	小　川　勝　洋
田　中　宏　樹	細胞・器官系	小　川　勝　洋
佐久川　直　子	細胞・器官系	石　川　睦　男
盛　一　健太郎	細胞・器官系	高　後　　裕
齋　藤　幸　裕	生体情報調節系	笹　嶋　唯　博
菅　野　貴　康	生体情報調節系	菊　池　健次郎
佐々木　高　明	生体情報調節系	菊　池　健次郎
田　代　直　彦	生体情報調節系	菊　池　健次郎
澁　川　紀代子	生体情報調節系	菊　池　健次郎
澤　田　　潤	生体情報調節系	菊　池　健次郎
油　川　陽　子	生体情報調節系	菊　池　健次郎
安　井　文　智	生体情報調節系	吉　田　晃　敏
松　尾　公美浩	生体情報調節系	藤　枝　憲　二
鈴　木　　滋	生体情報調節系	藤　枝　憲　二
吉　崎　隆　之	生体防御機構系	若　宮　伸　隆
鈴　木　智　憲	人間生態系	吉　田　貴　彦

修士課程

氏　　名	専　　攻	研究指導教員
田　中　惠美子	看護教育学	岡　田　洋　子
高　儀　郁　美	小児・家族看護学	岡　田　洋　子
和　田　雅　子	小児・家族看護学	岡　田　洋　子
吉　永　ひいな	小児・家族看護学	岡　田　洋　子
永　谷　智　恵	小児・家族看護学	岡　田　洋　子
苫米地　真　弓	母子看護学	野　村　紀　子
升　田　由美子	母子看護学	松　浦　和　代
神　成　陽　子	母子看護学	野　村　紀　子
野　村　理賀子	母子看護学	野　村　紀　子
根　本　和加子	母子看護学	松　浦　和　代
作　並　亜紀子	生活習慣病看護学	服　部　ユカリ
渡　邊　充　広	生活習慣病看護学	服　部　ユカリ
留　畑　寿美江	生活習慣病看護学	服　部　ユカリ

新入生歓迎合宿が終わって

新入生歓迎実行委員会 医学科第２学年　**佐々木　優　花**

期待と不安でいっぱいだった私たちがこの大学に迎え入れられてからあっという間に１年がたち、今度は私たちが新入生を迎え入れる立場となった。

私は新歓委員として、毎年恒例の新入生歓迎合宿に参加したが、大きなアクシデントもなく終えることができ、ホッとすると同時にうれしく思っている。連絡が行き届かず、様々なハプニングもあったが、新入生どうし、あるいは新入生と上級生との交流を様々な場面で深めることができたように思う。

また私たち２年生も普段とは違う一面を見ることができ、より絆を深めることができた。

もちろん反省すべき点もあるが、それは引継ぎでカバーして、次の合宿も新入生に『楽しかった』といってもらえるような素晴らしいものにしてほしい。

東医体の運営に携わって

第47回
東日本医科学生総合体育大会
運営委員長旭川医科大学医学科３年
民　谷　健太郎

東医体（正式名称：東日本医科学生総合体育大会）は、西医体・国体に次ぐ全国最大規模の総合体育大会の一つです。参加校は36校、エントリー人数は一万人強を誇ります。また、東医体の歴史は今年で47年目を迎え、その歴史が半世紀にまで及ぼうとしています。このような大規模で伝統のある大会を学生が運営してきたということには改めて驚きの感情を覚えます。

以前は、夏季競技と冬季競技のそれぞれに主管を一校ずつ置き、持ち回りで運営を行ってきました。旭川医科大学もかつて冬季競技の主管に携わったこともあります。しかし、一校で運営を行う（特に夏季競技）にも限界があるという理由で、約十年前から『四校一グループ制』という運営形態に移行しました。それは、36校を四校ずつの9つのグループに分け、主管四校が競技を分担して運営するという形態です。

旭川医科大学はIグループ（９あるうちの最後のグループ）に属しています。Ｉグループは、旭川医科大学・北海道大学医学部・札幌医科大学・弘前大学医学部の四校から構成されています。第47回大会、つまり今年度の東医体は旭川医科大学が総合主管を担当することになっています。

さて、長々と東医体の説明をしてまいりましたが、私たち東医体運営委員会がどのような仕事をしているかということに触れたいと思います。まず、私が東医体運営委員長になった経緯を説明させていただきます。「人の為になるような仕事をしたい」というような大義名分のためにこのような重役を引き受けたわけではなく、ただ「たくさん友達できそう」という単純な理由からこの世界に足を踏み入れてしまったのですよ。そのような安易な動機で、いわば勢いだけで始めてみたものの、やはり想像していた

以上に大変な仕事だということに間もなく気付かされました。今となってはもう末期症状で、「東医体なんてなくなってしまえばいい」という境地にまで達しています。東医体の準備が着々と進んでいる一方で、このような偉大な破壊欲が水面下で膨張していることはあまり公にはできない重要機密であることを付記しておきます。

第47回東医体旭川医科大学運営本部役員は現四年生を中心に（中には三年生もいますが…）構成されています。役員は30名弱おりますが、そのほとんどが私の胡散くさい勧誘で騙されたくちです。「おもしろいよ～」「つらくないって」「こんな機会、滅多に無いでしょ？」口説きに口説きました。みんな非常に協力的で嫌な顔一つしなかったこと(!?)にこの場を借りて感謝したいです。確かに大変ですが、私自身はこの仕事を通じてたくさんの良き出会いに恵まれたことを幸運に思います。

一年前の４月に本格的に始動し、ついに大会を直前に控えるまでになりました。数々の会議を経て、運営予算の作成、競技会場の確保、競技日程の設定後援依頼、安全対策、エントリー、大会プログラム・ポスターの作成、式典の企画等、様々な仕事を行ってまいりました。第47回東医体が無事全日程を終えることができるように、それが私たち東医体運営委員会のすべてであります。

今年度の大会が皆様にとって良い大会になりますようお祈り申し上げ、また、これまでにお世話になった数多の方々に感謝の気持ちを申し上げ挨拶文とさせていただきます。

学生による授業評価（平成15年度後期分）の結果公表にあたって

授業評価委員会委員長　近　藤　　均

本学では、平成13年度から学生による個々の教員に対する授業評価と科目全体の企画に対する評価とが実施されており、14年度からは、評価結果の概要を本誌「かぐらおか」に掲載することになっています。14年度は1年間分をまとめて公表しましたが、15年度からは前期分・後期分に分けて掲載することになりました。今回公表するのは15年度後期分です。

公表の内容は過去の方針に則っています。すなわち、（1）全教員の得点分布および部局別教員の平均点と最高点・最低点。（2）評価を受けたすべての教員のうち、得点が上位20％以内に入る教員の氏名・所属、評価を受けた科目（必修・選択の区別）・日時・対象学生・履修者（登録者）数、評価用紙の配布数・回収数・回収率。（3）高得点の上位３名の教員の、個々の設問（問3～14）ごとの点数と教員自身によるコメント。以上の３点を掲載しました。

いうまでもなく、学生による授業評価の最大のねらいは、授業の内容や方法について学生と教員がコミュニケーションを深めることにより、教員が学生の声を真摯に受け止め、それを授業の改善につなげていくことです。点数を付けて教員を序列化することが目的ではありません。

平成15年度の本委員会では、従来の評価項目の見直しと手直しを進めてきました。平成16年度からは手直し後の新しい項目を用いて評価を実施することになっています。より客観的な授業評価になるものと期待されます。

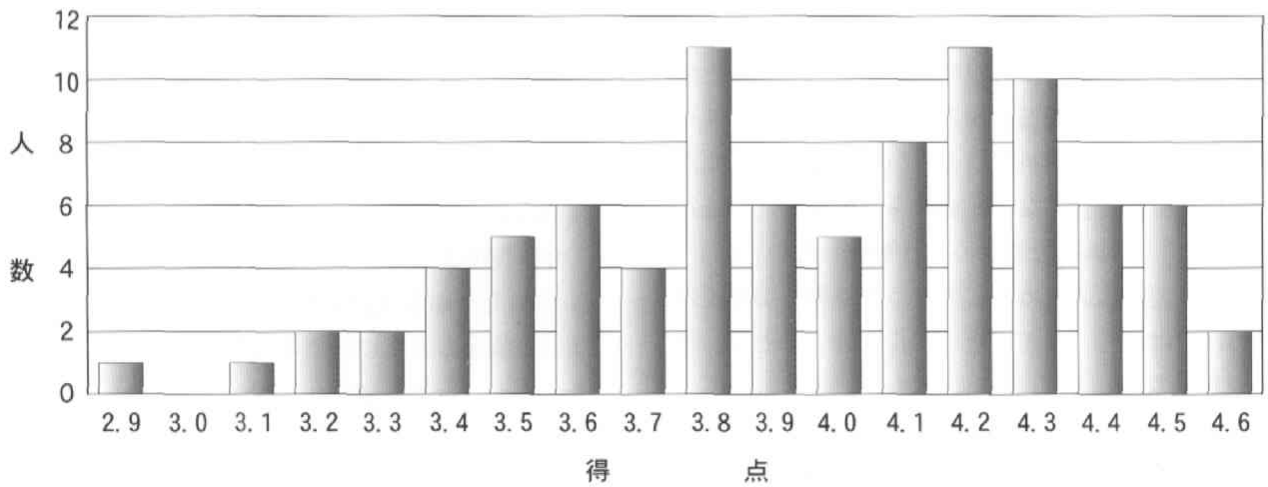
今後も、評価の内容や方法をさらに改善・充実させるために、授業評価委員一同、検討と検証を進めていく所存ですが、教員・学生の皆さんからも忌憚のない御意見をお寄せいただければ幸いです。

なお、最後に念のため申し添えますが、アンケート用紙のコンピュータ処理は学生課教務係に一任しており、本委員会のメンバーは個々の教員の点数を知り得る立場にはありません。

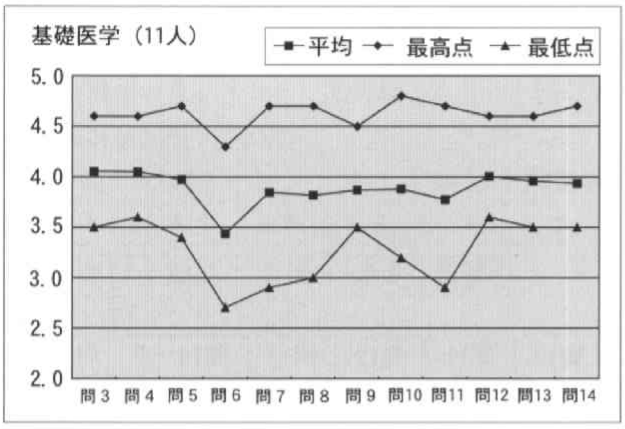
平成15年度後期「講義に対する学生評価」における全教官の得点分布

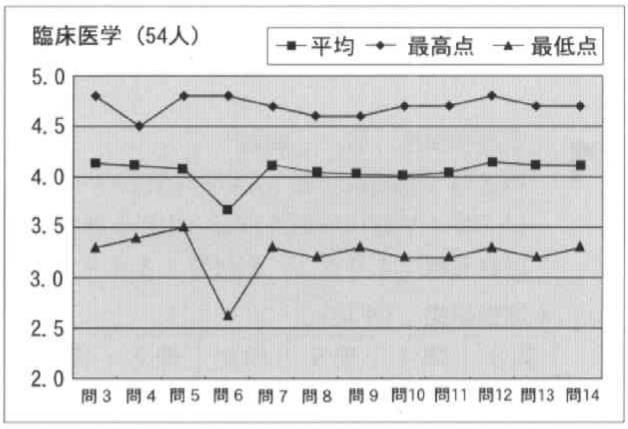
	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6
人数	1	0	1	2	2	4	5	6	4	11	6	5	8	11	10	6	6	2

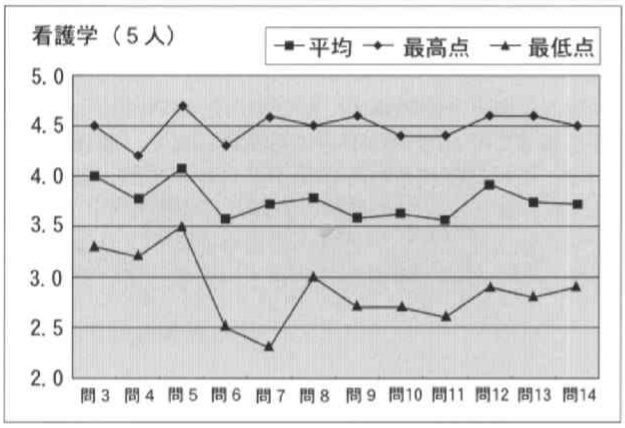
（合計　90名　平均値　4.0）

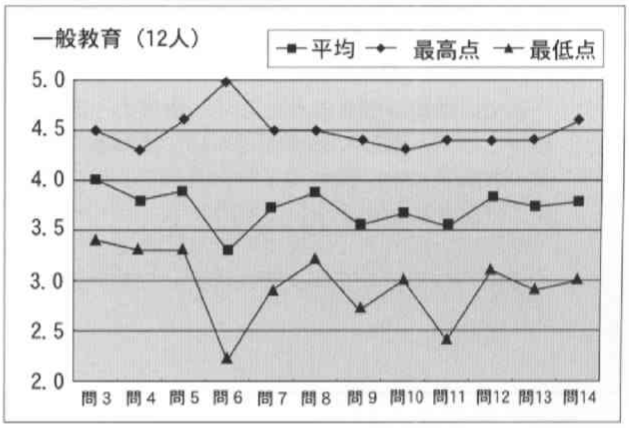


問３～１４の各平均点と最高・最低点









講義に対する学生評価

あなた自身について	問１　講義を受ける前に、履修要項を読む等予習をしましたか。 問２　この授業中に、授業内容を理解するための努力をしましたか。
講　義　計　画	問３　講義はよく準備がなされていましたか。 問４　履修要項に沿った講義でしたか。
教　育　意　欲	問５　教育に対する熱意が感じられましたか。
教　育　態　度	問６　教官は授業の中で、学生の参加（質問・発言等）を促しましたか。
講　義　技　術	問７　明瞭で聞き取りやすい話し方でしたか。 問８　教材（プリント、スライド、板書等）は適切でしたか。 問９　今後の学習の意欲を増す内容でしたか。 問10　教官は講義において重要なところを強調してくれましたか。 問11　授業は理解しやすかったですか。 問12　知識が豊富で論理力に優れていましたか。
総　合　評　価	問13　講義に出席した価値がありましたか。 問14　この講義に対する総合評価をしてください。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

高得点者　TOP3

1

薬理学講座　原　　明義

科目名：基礎医学Ⅱ　(医学科第２学年後期／必修科目)

日　時：平成15年12月18日（木）１講目

履修者数：１０３　　配付数：８４　　回収数：７２　　回収率：８５．７％

＊評価結果　(平均)

問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	平　均
4.6	4.6	4.7	4.2	4.7	4.7	4.5	4.8	4.7	4.6	4.6	4.7	4.6

＊評価に対するコメント

過去の講義評価を参考にして、講義の一部見直しを行ったことが、今回の評価に結びついたのでしょう。教官として、嬉しく思うとともに、これまで有益な意見等を寄せてくださった学生に感謝致します。薬理学の教科書には、極めて多数の薬物について記載されており、それに圧倒される学生が多いのですが、講義では重要な薬物や項目を解説するとともに、薬に関する歴史、エピソードや最近の話題などを交えて、「薬理学の面白さ」を提供できればと考えております。大学の法人化に伴い、教育の改善や充実がより強く求められていますが、それに少しでも貢献できるよう今後も更なる努力を重ねていきたいと思っています。

2

眼科学講座　吉田　晃敏

科目名：眼科学　(医学科第４学年後期／必修科目)

日　時：平成16年１月23日（金）４講目

履修者数：１０６　　配付数：９２　　回収数：８８　　回収率：９５．７％

＊評価結果　(平均)

問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	平　均
4.8	4.2	4.7	4.3	4.7	4.6	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6

＊評価に対するコメント

第４学年学生（106名）を対象とした私の「眼科学」の講義が、学生からの評価の結果、昨年に引き続き第２位との知らせを聞き、18年間教官を務めている者として大変嬉しく思う。

私は、教官と学生が共に授業の主役であると考えているので、視覚、聴覚に訴える双方向で展開する授業を心がけている。学生達に眼科手術の最先端を知ってもらい、患者さんの視力が回復していく過程がいかに感動的かをわかりやすく対話するよう心がけている。

今後も謙虚に学生の「評価」に耳を傾け、楽しく教育に力を尽くしたい。

3

皮膚科学講座　飯塚　一

科目名：皮膚科学　（医学科第４学年後期／必修科目）

日　時：平成15年10月23日（木）２講目

履修者数：１０６　　配付数：９６　　回収数：８１　　回収率：８４．４％

＊評価結果　（平均）

問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	平　均
4.6	4.5	4.8	3.6	4.5	4.4	4.6	4.6	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5

＊評価に対するコメント

講義アンケートの集計の結果、小生が３位という連絡を受けた。大変光栄に思っている。

医学は、いまだ科学というには脆弱な基盤の上に立っており、暗記に頼らざるを得ない部分が極めて多い。そういう意味で皮膚科は典型的な暗記科目である。自分の場合、自分に理解できる範囲で、なるべく因果関係を説明しようとは思ってやってきた。もしかしたら、その部分が評価されたのかもしれない。

アンケート結果にあわせて資料がついてきたのでみたら、問６に対する点数がやけに悪い。そこで見てみたら、教官は授業の中で学生の参加（質問、発言等）を促しましたか？という項目になっていた。考えてみると自分はそういう働き掛けをしたことは１度もないので、なるほど低いわけだと納得した。

もう１つ、自分は不在のことが非常に多く、皮膚科の場合、履修要項の順番通り講義が進行できたためしがない。皮膚科の講義予定が結構変わるのは、これは全面的に小生の都合によるもので、教室の連中が小生にあわせてくれているからである。これは学生諸君にも申し訳なく思っている。

以下４．３以上（上位20％内）の教員は次のとおりです。（＊五十音順）

所　属　名	教　員　名	科　目　名	日　　時	学年	履修者数	配付数	回収数	回収率(%)
整形外科学講座	熱　田　裕　司	整形外科学	平成15年11月11日(火) 2講目	医４	106	77	71	92.2
看護学科	伊　藤　幸　子	母性看護学	平成15年12月12日(金) 3講目	看３	63	43	43	100.0
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	今　田　正　信	耳鼻咽喉科学	平成15年12月２日(火) 1講目	医４	106	94	79	84.0
麻酔・蘇生学講座	岩　崎　　寛	麻　酔　学	平成15年11月４日(火) 4講目	医４	106	98	86	87.8
内科学第一講座	菊　池　健次郎	内　科　学	平成16年１月７日(水) 3講目	医４	106	106	91	85.8
歯科口腔外科学講座	北　　進　一	歯科口腔外科学	平成16年１月５日(月) 5講目	医４	106	84	64	76.2
英語	サイモン・N・ベイリィ	医学英語ⅡB	平成15年10月31日(金) 5講目	医２	24	24	24	100.0
麻酔・蘇生学講座	鈴　木　昭　弘	麻　酔　学	平成15年12月９日(火) 4講目	医４	106	97	86	88.7
生理学第二講座	高草木　　薫	基礎医学Ⅰ	平成16年１月30日(金) 2講目	医２	103	80	73	91.3
精神医学講座	布　村　明　彦	精神医学	平成15年12月５日(金) 3講目	医４	106	79	69	87.3
泌尿器科学講座	橋　本　　博	泌尿器科学	平成15年11月６日(木) 1講目	医４	106	85	77	90.6
内科学第一講座	長谷部　直　幸	内　科　学	平成15年10月15日(水) 2講目	医４	106	104	85	81.7
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	原　渕　保　明	耳鼻咽喉科学	平成16年１月６日(火) 1講目	医４	106	65	62	95.4
眼科学講座	引　地　泰　一	眼　科　学	平成15年12月19日(金) 4講目	医４	106	79	65	82.3
外科学第一講座	平　田　　哲	外　科　学	平成16年１月16日(金) 5講目	医４	106	91	82	90.1
眼科学講座	森　　文　彦	眼　科　学	平成16年１月16日(金) 4講目	医４	106	82	73	89.0
病理学第一講座	柳　沼　裕　二	基礎医学Ⅱ	平成15年12月17日(水) 3講目	医２	103	70	69	98.6
麻酔・蘇生学講座	安　田　　茂	麻　酔　学	平成15年10月28日(火) 4講目	医４	106	104	95	91.3
泌尿器科学講座	山　口　　聡	泌尿器科学	平成15年12月11日(木) 5講目	医４	106	101	80	79.2
皮膚科学講座	山　本　明　美	皮膚科学	平成15年11月６日(木) 2講目	医４	106	90	75	83.3
解剖学第一講座	吉　田　成　孝	基礎医学Ⅰ	平成15年11月12日(水) 1講目	医２	103	65	61	93.8

演習企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　演習用の配付資料を読む等も含め、演習前の予習は十分でしたか。 問２　演習に積極的に参加したと思いますか。 問３　演習への取り組みは学習目標へ到達を目指す態度として適切なものでしたか。 問４　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
演　習　計　画	問５　事前に演習目標と概要の説明がなされていましたか。 問６　演習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問７　学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。 問８　演習を展開する上で適切な能力を備えた人材が配置されていましたか。 問９　指導教官間の連携は機能していましたか。
演　習　内　容	問10　演習内容はこれまでの講義内容と関連づけて理解しやすいものでしたか。 問11　事前に配布された資料は、実技を行う上で役立つ内容でしたか。 問12　演習によって課題の要点を理解し、基礎的な技術を習得できましたか。 問13　演習内容の難易度は適切でしたか。 問14　演習によって臨地看護学実習に出る意欲がわきましたか。
演　習　環　境	問15　演習用の設備、機材、用具等は必要十分な性能と量でしたか。 問16　演習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問17　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問18　この演習は価値のある内容と思われましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：看護研究（統計学含む）（看護学科第３学年後期）
履修者数：７２　　配付数：６１　　回収数：５８　　回収率：９５．１％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	2.8	3.5	3.4	2.6	2.6	3.1	2.6	2.0	2.5	2.7	2.4	2.7

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

看護研究（統計学含む）コーディネーター　**望　月　吉　勝**

大変に厳しい評価でした。授業が難しすぎる、課題提出が多すぎる、教官によっては授業に使う機器の操作に習熟していず時間がかかりすぎるなどの指摘がありました。
指摘があったことについては謙虚に受け止め、改善していきたいと思います。

開講時に説明したように、この科目では研究のプロセスに関する知識とスキルを学び、４年生での卒業研究、さらには卒業後の勤務先での研究につなげることを意図しています。そのために、研究の一般論、看護学領域での研究、パソコンによるデータ解析演習の３つのパートから構成してあります。データの収集と分析のように、具体的な手法を学ぶステップがあると同時に、学術上の新たな発見という研究本来の目的のために、２つの「そうぞう（想像＋創造）」の能力を鍛錬することも含まれます。こうした多様さから努力する方向や到達点が分かり難いと感じたのかもしれません。

各パートの分担と各々の達成目標をもっと明確に示すことと、より分かり易い授業を目指したいと思います。これまでもPowerPointで図解教材を作成したり、学会誌掲載の原著論文を教材としてゴールを見定めながら研究のステップを学ぶという授業構成など創意工夫を重ねてきたつもりです。学生諸君にも自ら学ぶための創意工夫をもっと試みてもらいたいと思います。

科目名：小児看護学　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６２　　配付数：６２　　回収数：６２　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.3	3.7	3.5	3.4	3.4	3.3	3.0	3.4	3.5	3.5	3.2	3.4	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.4	3.3	3.6	3.6	3.4

＊評価に対するコメント

小児看護学コーディネーター　**岡　田　洋　子**

学生自身に関する評価項目で最も高かったのは、昨年同様「授業内容を理解するために努力したか」である。努力の内容は不明であるが、教育目標の「受身ではなく自ら課題に向って学ぶ姿勢・方法の修得」の結果と解釈したい。評価の中で最も低かった項目は、演習計画の「学生数に対し、指導教官数は適切か」の3.0である。小児看護学担当教官数は、看護学科開設時の定員３名から１名減の２名(教授と助手１名)で展開している。担当科目の中で小児看護学のみをピックアップしても、講義・演習・実習(３・４年次)と大学院がある。特に学習の統合の場である演習・実習における学生への影響が予測され、15年度から欠員補充を求めている。「演習内容は講義内容と関連づけて理解しやすいものか」は昨年より0.4アップしている。これは「小児の理解」から「小児看護技術」の習得まで、学習内容の精選と時期・方法を含め系統的展開を意図してきた成果の一つと考える。小児看護技術は成人と異なる特殊性がある。この学生評価を生かし、各領域の技術をまとめて展開する「実践看護技術学」から小児看護技術分の時間はもらい受け、従来どおり系統的展開の充実を図っていく。

科目名：基礎看護技術学Ⅰ　（看護学科第１学年後期）
履修者数：６１　　配付数：６１　　回収数：６１　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.2	3.9	3.7	4.0	4.2	3.8	3.7	3.6	3.9	4.0	3.8	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	4.0	3.9	3.4	4.1

＊評価に対するコメント

基礎看護技術学Ⅰコーディネーター　**良　村　貞　子**

本科目は第１学年に開講している看護専門科目の演習（90時間）である。学生は健康問題をかかえる人々の日常生活を支援するための基本的看護技術を学習する。演習では片麻痺のある入院患者さんを想定し、どのような援助が必要かを各履修主題にそって考え、学生それぞれが患者役、看護師役、観察者となって援助を実施し、その後、自己評価、他者評価を行なう。基本的な援助技術の習得には、授業時間内だけではなく自主的な学習も必要となる。

ほとんどの学生が熱心に演習に参加しており、自己学習にも積極的に取り組んでいたため、総合評価（問18）が4.1との結果になったと考える。今後も学生が演習しやすい実習室の環境整備に努め、より意欲を高めるような演習内容となるようさらに努力したい。

科目名：地域看護学Ⅱ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：７２　　配付数：７２　　回収数：７２　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	3.6	3.4	3.3	3.5	3.4	3.2	3.3	3.4	3.4	3.3	3.2	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.4	3.5	3.6	3.3

＊評価に対するコメント

地域看護学Ⅱコーディネーター　**北　村　久美子**

地域看護学Ⅱは、３学年の科目で地域を看護の対象とし、受け持ち地区に対して責任を持って、地域看護活動を展開するための基本的な知識・技術・態度を学ぶことを目的としています。

昨年度と本年度は、３単位(90コマ)で通年にわたる授業で、後期に行われた「地域看護学実習１」を視座におき、その前後の到達目標を設定して展開しました。

前年度に比べ「問２」「問３」は同じ評価点で、他のいずれの問も1.0～4.0と高い評価点でした。学生は「実習では講義で学んだことを最大限に活用した」「実習に役立つ演習だった」「１年間をとおして地域看護学がわかってきた」との感想を書いていましたが、次年度は、２単位(30コマ)前期のみで時間数も大幅に減少するため、授業内容および方法の創意工夫が求められていると思います。学生の評価を真摯に受け止め、より充実した授業内容になるよう「地域看護学」全体におけるカリキュラムの検討が必要であると考えています。

科目名：母性看護学　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６２　　配付数：６２　　回収数：６２　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.1	3.6	3.7	3.5	3.7	3.5	3.5	4.0	2.9	3.7	3.6	3.5	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	3.6	3.7	3.4	3.6

＊評価に対するコメント

母性看護学コーディネーター　**野　村　紀　子**

今年度の演習はpaper patientを用いた事例展開を中心に行った。母性看護に必要な技術の演習は、４年次の実習直前に集中して細み入れているため、３年生では演習最後の数時間を「看護技術を体験してみる」ことを目的として行った。

各評価について、「適切な人材が配置されていた」という項目の評価点数4.0に対し、「教官間の連携機能」に関して2.9と低い評価であった.この問８と問９との関係において、この相違をどのように解釈すべきものか判断に迷う。

自由記載には「講義内容と結ひついた演習だった」「役に立つ演習だった」という反面、「時間が足りなかった」という評価もあり、さらに演習内容の吟味と時間配分の検討が必要である。

科目名：成人看護学Ⅱ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６２　　配付数：６２　　回収数：６２　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	3.8	3.6	3.3	3.6	3.6	3.2	3.6	3.1	3.4	3.7	3.5	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	3.4	3.2	3.1	3.7

＊評価に対するコメント

成人看護学Ⅱコーディネーター　**野　村　紀　子**

今まで、３学年の成人看護学における演習は、グループワークが中心で、看護技術は、全く行われていなかった。従って、４学年の臨地実習では、日常生活の援助技術が中心であった。３学年の演習は、４学年の実習を充実させることにつながり、そのまま卒業後の就職にもかかわる問題ともなる。卒後の学生自身の自信につながり、リアリティーショックを軽減するものと考えられる。

看護学科では、平成14年「臨地実習ガイドライン」を作成し、各学年における技術習得項目を提示し、卒業までに学ぶ必要のある看護実践技術を各学年演習に取り入れた。学生からは、おおむね好評であったと考えている。演習は３名の教官で実施したが、指導教官の不足を指摘する学生が多い。演習に関しては、必ずといっていいほど教官の不足を指摘する。非常に不快であり、対応に苦慮する。

実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　実習用の配付資料を読む等も含め、実習前の予習は十分でしたか。 問２　実習に積極的に参加したと思いますか。 問３　実習への取り組みは学習目標へ到達するための態度として適切なものでしたか。 問４　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
実　習　計　画	問５　事前に実習目標の説明がなされていましたか。 問６　実習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問７　学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。 問８　実習を展開する上で適切な能力を備えた人材が配置されていましたか。 問９　指導教官間の連携（実習中の支援等）は機能していましたか。
実　習　内　容	問10　実習全体の内容は関連する講義科目の内容と対応がとれていましたか。 問11　実習内容の難易度は適切でしたか。 問12　準備された説明書・実習書は実習内容を把握するのに役立ちましたか。 問13　今後の学習への興味を増す内容でしたか。
実　習　環　境	問14　実習用の設備、機材、用具などは必要十分な性能と量でしたか。 問15　実習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問16　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問17　各項目は実習として行う価値のある内容と思われましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：精神看護学実習　(看護学科第４学年通年)
履修者数：５５　　配付数：５３　　回収数：５２　　回収率：９８．１％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.7	4.4	4.0	3.6	3.9	3.9	4.1	3.8	3.7	3.5	4.0	2.7	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	3.7	3.9	4.0	4.0

＊評価に対するコメント

精神看護学実習コーディネーター　**新　開　淑　子**

本実習では、精神医療における看護の役割・機能および精神を障害された個人とその家族の理解を深め、精神の健康回復への援助を修得すること、さらに援助過程を通して、自己洞察しえる能力を養うことを目的としている。精神看護における援助技術は、患者と看護師の対人関係により成立する。つまり患者は看護師との関係が深まるにつれ、自分の内面をより一層表現し看護師と共に問題解決への道を歩もうとする。従って、看護師が患者との間に対人関係を発展させる能力を持ち合わせていないと、患者理解が表面的となり、共に問題解決への道を歩むことができない。学生もしかりである。学生は患者との対人関係形成の難しさに直面し、悩み、試行錯誤しながらでも患者に受け入れられる体験をすることが重要となる。今回の評価結果を見ると、多くの学生はその課題を達成できたのではないかと考える。そこには指導教官や臨床実習指導者の協働した学生指導が必要であるが、今後より充実した指導体制が整えられるよう検討していきたい。

科目名：看護過程論実習　(看護学科第２学年後期)
履修者数：５９　　配付数：５６　　回収数：５６　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.6	4.4	4.1	4.4	4.1	3.8	3.9	4.0	4.0	4.3	3.7	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	4.1	4.1	4.1	4.4

＊評価に対するコメント

看護過程論実習コーディネーター　**良　村　貞　子**

第２学年で行なう２週間の病棟実習である。平成15年度の実習場所は、本学の附属病院と旭川赤十字病院の２施設である。本実習は、受け持ち患者に対し、健康状態をアセスメントし、看護問題を明確化して看護計画を立案し、実施および評価するという看護過程を体験的に学習するものである。

総合評価４．４に示されるように、ほとんどの学生が看護の専門性に対する関心や意欲を高めることができたと回答していた。自由記載でも、「患者さんの状態が変わりすぎて大変であったが、充実した実習だった」「大変有意義な実習だった」「臨床の指導者さんから適切な助言を受けることができた」などの意見があった。今後も、学生の学習意欲の高まりを維持向上できるよう、実習指導者とのよりよい連携のもとで実習を展開できるよう努力していきたい。

科目名：生命科学実習Ⅱ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９０　　配付数：８９　　回収数：８８　　回収率：９８．９％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.3	4.1	3.8	3.9	3.8	4.2	3.6	3.7	3.4	3.6	3.6	3.9	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	3.5	3.6	3.5	

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅱコーディネーター　**谷　本　光　穂**

この実習科目は、クラス別に行われ、また、３テーマを順次実習していく方式で展開されている。評価は、クラス別に行った（Ａ組平成15年1月20日、Ｂ組平成16年1月22日）が、特に違いはなかった。

学生の評価は、おおむね3.5以上であり、内容、指導方法などはある程度の評価は得られたと理解している。自由記載欄への記入項目を読むと、実習時に先生による指導が足ないというコメントが見受けられた。法人化に向けて連日のごとく会議が入り、十分指導できなかったことの影響で、学生諸君には申し訳なかったと思っている。来年度はよりきめの細かい指導を心掛けたい。前年度の学生の希望もあり、予習の便も考えてホームページに実習のテキストを掲載しているが、殆どの学生は予習をしていないようで（問１評点3.3)、誠に残念である。学生諸君には事前にホームページを見るように徹底させておきたい。

科目名：基礎医学実習Ⅴ　(医学科第４学年後期)
履修者数：１００　　配付数：１００　　回収数：８６　　回収率：８６．０％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.7	4.3	4.2	4.0	4.1	3.9	3.7	4.0	3.8	3.8	3.9	3.7	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	4.0	4.0	4.0	

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅴコーディネーター　**吉　田　貴　彦**

基礎医学実習Ⅴは社会医学系講座が担当する実習であり、衛生・公衆衛生学は合同にて学生各グループが研究内容の別個テーマで実習し発表会を通して成果を分かち合う方式で、法医学は独自に全体テーマの実習を行っている。自由記載意見によると、衛生・公衆衛生実習ではテーマがグループ毎に異なるためか評価が大きく異なるようである。実習テーマが社会医学的内容を網羅したために、希望通りの実習テーマが得られなかった学生があった可能性がある。また教官が複数グループを担当するためそれぞれに割く時間に制約があった。実習展開時期が臨床系講義の多い時期であり実習に取り組む余裕が十分でない、発表会・レポートのまとめに際してコンピュータ室が自由に使えないなどの苦情があった。レポートがグループ提出のため作業にかかわる学生が限られ不公平を生じたグループもあったようだ。これらの問題は衛生・公衆衛生実習が決まった内容の実験を行うタイプでなく、独自の研究内容の実習であることに起因するものと思うが、できるだけ改善するように努力したい。

科目名：基礎看護学実習　(看護学科第１学年後期)
履修者数：６１　　配付数：５９　　回収数：５９　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.0	4.3	4.0	3.8	4.5	4.3	4.0	3.6	4.0	4.1	4.1	3.8	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	4.0	4.2	4.1	4.6

＊評価に対するコメント

基礎看護学実習コーディネーター　**良　村　貞　子**

看護学科第１学年の５日間の病棟実習である。平成15年度は、本学の附属病院と旭川赤十字病院の２施設で実習した。第１学年の実習では、看護に対する興味と学習のモチベーションを高めることをねらいとしているが、総合評価4.6に示されるように、ほとんどの学生が看護の専門性に対する関心や意欲を高めることができたと回答していた。自由記載でも、「たくさん色々なことを実践する機会を与えられ、多くのことを得られた」「とてもよい経験ができた」「とても有意義な実習だった」などの肯定的評価が多かった。また、「臨床の指導者の方から分かりやすく丁寧に指導していただけた」との記載も複数あった。

学生の学習意欲の高まりを維持向上できるよう、今後も実習指導者とのよりよい連携のもとで実習を展開できるよう努力していきたい。

科目名：生命科学実習Ⅲ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９０　　配付数：８８　　回収数：８８　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.6	4.1	3.9	3.7	3.4	3.8	2.9	3.5	3.4	3.8	3.7	3.8	3.2

問14	問15	問16	問17	問18
3.4	3.6	3.7	3.6	

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅲコーディネーター　**高　橋　龍　尚**

「実習計画」「実習内容」の評価が平均で約3.5である点は、今後大いに努力・改善が必要であると反省している。今後の具体的な課題としては、次の二つが考えられる：1)基本的・基礎的内容に関する知識と技術の習得、2)専門教育の学習にいかされる応用技術の習得。

基礎的な内容が十分でなければならないのは言うまでもないが、学生の中には１年生の実習で扱えないような高度なレベルに既に到達し、更に次のステップにチャレンジしたいと望む学生も少なからずいた。今後は、二つの要件を満たす改善を試みたいと考えている。問１の評価から、受講生の多くは予習を行っていないことが示唆された。これは厳しい判断をすると実習内容そのものが学生のやる気を引き出すには十分ではなかったものと考えられる。従って、今後は、実習内容の充実と共に自宅学習を促進するための工夫にも取り組みたいと考えている。

科目名：人間科学実習　(看護学科第１学年後期)
履修者数：６１　　配付数：６０　　回収数：５８　　回収率：９６．７％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	4.2	3.9	3.8	3.9	4.0	3.7	4.0	3.9	3.7	3.6	3.9	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.8	3.9	3.8	3.8	

＊評価に対するコメント

人間科学実習コーディネーター　**林　　要喜知**

毎年、本実習に対する学生の取り組み姿勢や意欲はとても高い。学生評価点の平均はおよそ3.8であり、昨年度とほぼ同様であった。昨年度の化学実習課題への要望に対して、幾つかの改善を試みた。本年度の数字には必ずしも反映されてはいないが、学生の自由意見の内容から判断すると、この取り組みはある程度功を奏していると推察された。ただ、今年度も、化学や物理実習に対する要望が若干あげられていたので、さらなる改善を心掛けたい。その他の要望では、1)授業評価は、各実習分野ごとにしたい、2)化学実習と他の実習科目(基礎看護学実習)との同時期展開をさけてほしい、という制度に関する問題点があった。1)については、授業評価に基づいた学生へのフィードバックを進める上で必要であり、2)は、カリキュラム編制上の問題として、大学全体で早急に対応すべきものと考えている。

科目名：生命科学実習Ⅳ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９２　　配付数：８１　　回収数：７２　　回収率：８８．９％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.2	4.0	3.7	4.0	4.1	3.2	3.9	3.8	4.2	3.4	3.8	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.8	3.6	3.8	

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅳコーディネーター　**渡　部　　剛**

本実習に関しては、昨年度までに、新しいカリキュラムの実習時間数に合わせて提出課題を厳選し直し、学習目標・到達目標や観察すべき構造を実習プリントに明記するようにした。その結果、昨年度の授業評価では平均で４点程度の評点をいただき、ほぼ満足のいく実習スタイルが確立されたと思われたので、今年も昨年度と同じプログラム・評価方法で実施した。しかしながら、今年度の学生からの評価は上記の通りあまり芳しくなく、正直なところ落胆している。上述したように実習プログラム自体は前年度までに確立されたものを踏襲していることから、今回の結果は本年度の学生の資質に起因する一時的なものであると考えたいが、もしこのような傾向が今後も続くようであれば、実習内容や到達目標をより低いレベルに設定し直す必要があるかもしれない。

科目名：老年看護学実習　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６２　　配付数：５７　　回収数：５７　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.3	4.0	3.7	3.9	3.9	3.2	2.6	3.5	3.5	3.7	3.6	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	2.9	3.3	3.3	3.4

＊評価に対するコメント

老年看護学実習コーディネーター　**服　部　ユカリ**

「あなた自身について」は、4.1, 4.3, 4.0, 3.7と全体的に高く、学生自身がそれぞれ達成感があったと考えられるが、一面で自己評価が高いという指導者の印象と合致するものである。

「実習計画」は、3.9, 3.9, 3.2, 2.6であり、グループあたりの学生数を少なくする必要性は我々も感じている。また、さらに教官と実習施設の指導者との連携を深めていきたい。

「実習内容」は、3.5, 3.5, 3.7, 3.6, 3.3, 3.3であり、カンファレンスの充実を図りたい。記録類は、必要最低限に絞るようにしたが、今後は高齢者の特徴がより明確になるものにしたい。

「実習環境」は、2.9, 3.3, 3.3で、問15は、残念ながら高齢者医療の現状を映し出している一面もあると言わざるをえない。そこから学生が何を感じ取り、考えたかを大切にして欲しいと思う。

本学に赴任して初めての老年看護実習コーディネイトであり、私を始め担当の教官は実習施設での研修をし、よりよい実習にと努めたが、「総合評価」は3.4で決して高くない。老年看護実習を３年次に実施することの意義も検討しつつ、自由記載欄の意見も参考にし、学生をエンパワメントする実習としたい。

科目名：生体観察実習　（看護学科第１学年後期）
履修者数：６１　　配付数：６０　　回収数：６０　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.2	3.8	3.7	3.5	4.0	3.4	3.4	3.3	3.7	3.4	3.5	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.5	3.1	3.7	

＊評価に対するコメント

生態観察実習コーディネーター　**岩　元　　純**

去年に比べて、得点が0.8ポイント落ちて、学生評価の部分の平均点が3．4となってしまいました。コーディネーターとしてはがっかりしています。ただし、履修目的の達成度が3．7だったのが、まあまあの得点で少し胸をなでおろしました。

実際の実習項目によっては、さまざまなことでご迷惑をおかけしたようで申し訳なく思っています。昨年度の状態と変更になった部分が、授業内容、教官配置の２つにありました。以前の状態に近づくように戻してまいりますので、今後ともご助言をお願いいたします。学生さんからのコメントのなかに、「大変勉強になった」「レポート課題も適切な内容と量だった」「この実習のおかげで、よく理解できた」という好意的なものと、「横暴な講義が多々あり」「学生が質問をすることができない程、教官の発言はよくなかった」というきわめて厳しいものが交じり合っていたので、その辺を詳しく検討して今後の改善につなげたいと思います。

科目名：小児看護学実習Ⅰ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：６２　　配付数：６２　　回収数：６２　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.4	4.2	3.9	4.0	4.2	3.5	3.7	3.4	3.8	4.0	3.8	4.1

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.9	3.9	4.0	

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅰコーディネーター　**岡　田　洋　子**

学生自身は昨年同様「実習に積極的に参加した」が最も高く評価している。昨年より下がった評価項目は実習計画の「学生数に対し、指導教官数と実習指導者数は適切でしたか」で、不足の声が多かった。反対に上がった項目は実習計画の「事前の実習目標の概要説明」、実習内容の「看護課程について指導教官・実習指導者からの助言」「看護技術を実践する機会」「カンファランスにおける討議」である。実習・カンファランスへの教授の参加を求める声がある。小児看護学は助手と教授の２名で担当、学生には申し訳ないが参加不可能（保育園と助手に一任）である。

小児看護学の講義時間数は、30時間（規定の三分の一）と昨年までの半分以下となる。小児看護学実習は、ⅠとⅡを合わせると規定の90時間より45時間多い（135時間）。そのため実習を規定時間にもどし講義時間数の補充に当てる等・・思案した。しかし学生の評価をみると、子どもとの関わりを通して学んだ小児の特徴や成長・発達の確認・理解を広げ、小児看護学実習Ⅱにつなげる貴重な体験であることを再認識、引き続き継続していく。

科目名：基礎医学実習Ⅰ　（医学科第２学年後期）
履修者数：９７　　配付数：９７　　回収数：９４　　回収率：９６．９％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	4.4	4.3	4.2	4.6	4.7	3.8	4.4	4.2	4.3	4.1	4.2	4.5

問14	問15	問16	問17	問18
4.3	4.4	4.5	4.6	

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅰコーディネーター　**吉　田　成　孝**

今年度の２年生は新々カリキュラムに移行し、従来の「解剖学実習」から「基礎医学実習Ⅰ」に変わった。これに伴い名前だけでなく内容にも変更を加えた。まず、放射線医学講座の協力を得て画像読影の基礎となる実習を行った。また、内臓解剖では授業との連携を強化するために共通の到達目標を明示し、毎回口頭試問もしくは小テストを行うことで目標が達成できているかを確認した。その結果、問１から問４までの学生自身の取り組みに対する評価が昨年より平均で0.4点高くなった。これは教官側の取り組みにより学生の自主性を引き出せた結果だと解釈して、非常に喜ばしく思っている。その他の項目についても、「教官の数」以外の全項目で昨年より平均0.3点高い評価を得ており、全体的にもよい評価を得たと考える。本実習は体力的にもハードな面があるが、それを乗り越える動機付けがされるようにさらに努力していきたい。

科目全体の講義企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　あなた自身の出席状況について、お答えください。 問２　あなたは、授業の前後に、授業を理解するための努力（予習・復習等）をしましたか。 問３　あなたは、授業中に、授業の内容を理解するように努めましたか。
科　目　構　成	問４　科目全体の履修の目的は、あらかじめ明確にされましたか。 問５　履修主題間で、内容の重複は避けられていましたか。 問６　各履修主題に割り当てられた授業時間数は適切でしたか。 問７　担当教官は、履修主題に沿って授業を行いましたか。
科　目　内　容	問８　各履修主題の難易度は、ほぼ同じ程度でしたか。 問９　科目全体の内容は、理解しやすいものでしたか。 問10　科目全体の内容は、今後の学習意欲を増すものでしたか。 問11　科目全体の履修の目的は、最終的に達成されましたか。
試　験　内　容	問12　試験、提出物（レポート等）の量と内容は適切でしたか。
総　合　評　価	問13　この科目全体の講義企画に対してのあなたの総合評価を示してください。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：基礎医学Ⅱ　（医学科第２学年後期）
履修者数：１０２　　配付数：６８　　回収数：５８　　回収率：８５．３％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	3.5	4.2	3.9	3.7	3.6	3.7	3.5	3.2	3.8	3.7	3.6	3.8

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

基礎医学Ⅱコーディネーター　**若　宮　伸　隆**

本年度から始まった基礎医学Ⅱは、薬理学、微生物学、寄生虫学の３科目の統合科目として設定されました。基礎医学Ⅰは、解剖→生理→病理の展開により、理解を高める方向性がとられましたが、基礎医学Ⅱは、従来通り３つの科目を並行して講義を展開する方式をとりました。学生諸君からの、講義全体の評価としては3.8でしたが、基礎医学Ⅱはこの方式で良いとする意見が圧倒的でした。しかしながら、なぜこの３科目が一つの統合科目となっているのかと、もっともな疑問もみられました。

また講義形式を、微生物学、薬理学は、週１回２時間連続して行う方式をとりましたが、このスタイルが理解しやすいという意見が多く、さらに講義全般に対して好意的な意見が散見されました。３科目の統合を活かせるような融合講義が必要とする意見もいただいており、コアカリキュラムからアドバンスコースへの必要性を学生諸君から提議されました。そのご意見に応えるべく、臨床感染症学が選択必修科目にて展開されます、３年生後期を楽しみにしていただきたい。

科目名：社会医学基礎Ⅳ　(医学科第２学年後期)
履修者数：９７　　配付数：８５　　回収数：７０　　回収率：８２．４％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	3.3	3.6	3.5	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8	3.6	3.6	3.7	3.7

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅳコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この授業は、医学教育モデル・コア・カリキュラムの中の「患者と医師の関係」をテーマとする授業です。教員は、哲学・倫理学を専門とする非常勤講師と、松岡で担当しています。

「患者と医師の関係」というテーマは、医療行為の中心にくる主題であり、色んな方向からのアプローチが可能なため、逆にどのように授業の中にとりこむか、常に迷わされることとなります。とくに人文・社会系の授業では、自然科学系と違い、ある法則や答えがあるわけではなく、自らが考え、自らの視点を獲得することが目標となりますから、「患者と医師の関係」についても、「こうです」という答えを出すことができません。ですが、授業である以上、ある一定の答えを出すことが期待されています。学生のコメントの中にある「方向性がない」「教科書を読んだ方がまし」「各先生が自分の言いたいことを言うだけ」という意見は、そのあたりの不満があらわれたものと考えています。

科目名：社会医学基礎Ⅱ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９０　　配付数：８０　　回収数：７７　　回収率：９６．３％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.6	3.0	3.9	3.2	3.4	3.5	3.4	3.5	3.2	3.1	3.1	3.3	3.2

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅱコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この授業は、医学教育モデル・コア・カリキュラムの中の「患者の権利」を授業のテーマとしています。担当は、哲学・倫理学を専門とする非常勤講師と、松岡です。授業の前半では理論的なこと、後半では生命倫理のケーススタディを扱いましたが、これまで生命倫理に触れたことのない学生に、いきなりケーススタディを与えて、どのように考えるかをグループで話し合ってもらったのは、どちらかといえば学生には不評でした。「結局、結論が出ずにぼんわりしたままの授業」という批判は、まさにその通りでしょう。

おそらく、必要なのは、「患者の権利」について、その歴史、意義、評価、問題点など、すでに答えの定まった部分について、説明していくことだろうと、今このコメントを書きながら考えています。

科目名：基礎医学特論　(医学科第２学年後期)
履修者数：９１　　配付数：８８　　回収数：８３　　回収率：９４．３％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.5	3.1	3.6	3.7	4.1	3.9	3.9	3.1	3.0	3.5	3.4	3.5	3.5

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

基礎医学特論コーディネーター　**谷　口　隆　信**

評価が低かったのは、問８の3.1と問９の3.0です。自由記載の意見においても(重複集計で計40票)　１．難解(難易度に差がある)、16票、　２．興味深い、10票、　３．レポートが書きにくい、８票、　４．コマ数過多／不要、６票、の４点に集約されました。

１についてはオムニバス的な構成上やむを得ない所ですが、最先端のテーマと理解し易さとは必ずしも相反するものでは無く、２学年後期での到達度を考慮し、語句や実験手法などは平易な解説を行うようにしたいと思います。

３については難解な内容もあると思いますが、教科書に載っていないようなものについては、文献や出版物、ＵＲＬなどを講義中に履修者に伝え、レポートを書く参考にできるようにしたいと考えています。

４につきましては厳しい御意見ですが、問10と問13で3.5を頂いていることから、「理解し易い」と「参考文献提示」を取り入れ、次回以降改善を期待したいと存じます。

科目名：生命科学Ⅵ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９１　　配付数：８８　　回収数：８３　　回収率：９４．３％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	3.4	3.7	3.7	3.1	3.2	3.6	3.2	3.0	3.5	3.3	3.2	3.4

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅵコーディネーター　**上　口　勇次郎**

先任のコーディネーターが他大学へ転出したことに伴って急きょ後任を引き受けたという事情もあり、講義担当教官と講義内容を昨年度と変更しないままで今年度も授業を展開してしまった。学生からの授業評価点は昨年度とほとんど同じであり、図らずも学生による授業評価の客観性が証明された形となった。

学生の指摘(自由意見)の主なものは、(1)授業担当教官の数(８名)が多すぎてまとまりがない、(2)教官どうしの連携が悪い、(3)１年生への科目としては内容が高度すぎる、などであった。もっともな意見ばかりなので、担当教官で早急に話し合いをもち、改善に努めたい。また、(3)の指摘に関しては、新新カリ３年後期の選択必修コースに「臨床遺伝学」の開講が決まり、臨床での診断に必要とされる人類遺伝学的知識をここで学ぶことになったので、この点も考慮しつつ講義内容の再構築を図りたい。

科目名：看護理論Ⅱ　（看護学科第３学年後期）
履修者数：７２　　配付数：７２　　回収数：７２　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.5	2.9	3.9	3.7	3.5	3.6	3.9	3.7	3.3	3.2	3.4	3.9	3.8

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

看護理論Ⅱコーディネーター　**良　村　貞　子**

第１学年での看護理論Ⅰの講義の後、本科目を第３学年で履修する。看護理論Ⅱでは、主要概念である「人間」「健康」「環境」「看護」を各看護理論家がどのようにとらえているか、それは何故か、また、具体的な看護活動を取り上げ、各理論に基づきどのように分析することができるかを学習する。なお、看護師の国家資格を有する編入学生も本科目を履修するため、基礎的内容の理解に加え、応用的展開も期待されている。

本科目において、学生自身が授業を理解する努力の評価は2.9であった。事前にレジメの配布を希望する自由記載もあり、学生の意欲を高める工夫が必要と考える。もっと事例を多く取り上げてほしかったとの要望もあり、今後はさらに学生が理解しやすいより具体的な講義内容にするよう努力したい。

科目名：生命科学Ⅳ　（医学科第１学年後期）
履修者数：９０　　配付数：９０　　回収数：８６　　回収率：９５．６％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	3.3	3.6	3.7	3.7	3.4	3.8	3.3	3.0	3.2	3.4	3.4	3.4

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅳコーディネーター　**中　村　正　雄**

平成14年度の生命科学Ⅳは他の教官の方々と相談し、内容を整理した。評価はこれが反映し比較的高い値が得られた。今年度は講義内容、資料ともに昨年とほぼ同じであるが、評価は全体的に低下した。定期試験終了時のアンケートでは“内容がわからない”、“説明が不十分”といった声が多かった。テストで課した、有機分子や生体分子の構造と機能についての問いには、記述の不完全な解答が目立った。多くの学生が内容を理解して記述していないことがわかる。これはアンケートの問８、９の低い値とも一致する。今年度は例年に比べ、講義後に質問を受ける数が少なかった。学生諸君の理解を不十分にしたまま講義を進行してしまったのだと判断される。次年度は講義のレベルを下げず、理解しやすい内容を心がける必要があると思われる。

科目名：健康教育論　(看護学科第１学年後期)
履修者数：７１　　配付数：７０　　回収数：７０　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.0	3.6	3.9	3.3	3.4	3.8	3.9	3.8	3.5	3.7	3.8	3.7

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

健康教育論コーディネーター　**望　月　吉　勝**

参加型授業を目指し、ピア・レクチャーの活用、健康教育の教材づくりのグループグループワーク、また、教育学専攻の学外講師により、小・中・高校生を相手に健康教育を行うという場面設定でのゲームやクイズを体験することなどを取り入れました。こうしたことが比較的良い評点につながったものと思います。

この科目内容を学部１年生が学習するための教科書探しに苦労しましたが、幸い昨年度からは、分かり易く自己学習に役立つ教科書を得ました。これらの教科書を得たことで、専門職者が一般の方に健康や病気について分かり易く説明するという場面設定での授業が可能となりました。自由記載欄に、こうした意図通りの感想を書いてくれた学生もいました。

グループ課題の発表会に関して、平成14年度には、病棟実習の時期にあって大変だったとの自由記載がありました。本年度は12月中に中間発表会、冬休みをはさんで本発表会と段階的に出来るように組んであることをよく説明しましたので、そうした指摘はありませんでした。

科目名：生命科学Ｖ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９０　　配付数：８８　　回収数：８３　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.4	4.0	3.9	4.1	4.0	4.2	4.1	4.2	4.1	4.1	3.9	4.2

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ｖコーディネーター　**高　橋　雅　治**

この講義は、基礎心理学、臨床心理学、発達心理学という３つの分野からなっており、精神医学や小児科学を理解するための基礎知識のみならず、全人的な医療の実現に必要な「人間の心理行動についての基礎知識」を系統的に身につけることを目的としている。

受講者自身についての評価が高かった項目は、問１（出席）と問３（理解努力）であった。実際、ほとんどの受講者は熱心に授業に参加していた。

一方、受講者自身について評価の低かった項目は、問２（予習復習）であった。従って、今後は予習復習を促すような指導を行う必要がある。

また、科目構成と科目内容についての８つの評価はすべての項目が3.9以上であった。特に評価が高かった項目は、７（スケジュール）、問９（解りやすさ）であった。このことから、科目の構成と内容はほぼ適切であったように思われる。

自由記載のところでは、「興味深かった」、「ビデオや資料が面白かった」、「楽しかった」などの評価が多かったが、一部では、「これだけの量だともう少し講義時間があってもよかった」、「テストの問題数が多く、手が疲れた」というような意見も聞かれた。今後はこれらの問題点を改善する必要があろう。

科目名：人間科学Ⅱ　(看護学科第１学年後期)
履修者数：７１　　配付数：７１　　回収数：７１　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	2.7	3.4	3.8	3.9	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.6	3.4	3.8

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

人間科学Ⅱコーディネーター　**近　藤　　均**

人間科学Ⅱはメディカル・ヒューマニティーズを内容とする看護学科第１学年の必修科目(３単位45コマ)である。社会学の専任13コマ、倫理学の非常勤15コマ、社会福祉の非常勤２コマ、それに歴史・哲学の専任(筆者)15コマという分担で、過去３年間、同じ配分である。評価結果であるが、昨年度と比較すると、概して良くなっている。

昨年度と比べ、問８で0.6ポイント、問９で0.5ポイント、問４で0.4ポイント上昇、問５、問６、問10でそれぞれ0.3ポイント上昇、問７、問11、問13でそれぞれ0.2ポイント上昇した。一昨年度と比べると更に上昇しており、教官側の努力がようやく実り始めたと評価してよいであろう。

試験・提出物の量と内容を尋ねる問12が昨年より0.1ポイント下降しているが、試験や提出物に大幅な変更を加えた事実もないので、これは誤差の範囲内と捉えたい。

問題なのは、学生自身の姿勢を尋ねる問１で0.3ポイント、問２で0.2ポイントそれぞれ下降していることである(問３は変動なし)。学生の成績(優良可の分布)も昨年に比べて悪くなっている。来年度は学生の意識改革を働きかけるよう努力したい。

なお、この科目は、諸般の事情により平成17年度からは専任のスタッフだけで運営せざるをえない雲行きである。いよいよ正念場の到来である。

科目名：生命科学Ⅶ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９２　　配付数：８４　　回収数：７９　　回収率：９４．０％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.8	3.6	4.0	4.3	4.1	3.5	4.1	3.7	3.8	3.8	3.9	3.3	4.0

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅶコーディネーター　**渡　部　　剛**

本科目の評価は、昨年度と比較して若干平均値が下がったものの、おおむね3.5以上のポイントを得ており、科目の企画・展開方法に関しては、ほぼ確立されたと思われる。昨年度から評価が低下した項目は、問６と問12で、また学生からのコメント一欄でも「学ぶことが多すぎる」という意見が、今年は目立った。しかしながら、本科目における講義内容の量・水準は昨年度と変わらないことから、今回の評価結果と昨年度の評価結果の違いは、学生側の学習意欲や資質などの差に起因するものと思われる。また、昨年の本稿でも書いたが、今後人類が進化して人体を構成する組織・器官の数が減るようなことでもない限り、残念ながら、医学全般の基礎としての組織学や病理学で学ぶべきことがこれ以上減ることはない。もちろん、我々は、自学自習の意欲に満ち向上心のある学生に対しては、今後も積極的に支援していきたいと考えているので、組織学・病理学の領域で質問・疑問が生じた場合には、気軽に担当教官まで尋ねに来て欲しい。

科目名：総合臨床医学Ⅲ　(医学科第３学年後期)
履修者数：９３　　配付数：９０　　回収数：９０　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.3	3.9	3.9	3.5	3.7	3.9	3.6	3.8	4.0	3.9	3.5	3.9

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅲコーディネーター　**髙　後　　裕**

総合臨床医学Ⅲは、消化器内科(肝臓、消化管)、消化器外科、血液内科の一部が統合された科目である。総合評価(問13)は3.9で、また今後の学習意欲を増す(問10：4.0)というもので、自由記載欄の意見をみても「総合臨床医学という枠組みの中では、もっともその内容と関連性がまとまっており」、「チュートリアルと平行して理解しやすかった」との意見があり、学生の多くも理解ができたようである。おそらく主体が消化器疾患で、血液学も出血や貧血など消化器疾患と関連する講義で構成されていたことが要因であろう。

試験の出題範囲に関しては、60分の講義内容を超えているとの指摘がみられた。しかし、臨床医学の講義は、講義で話された有無に関わらず、臨床現場での十分な知識の蓄積が要求されるため、関連範囲の基礎的事項であれば出題されるため、講義と平行して教科書による関連分野の自主学習が必須であることを、学生諸君は理解してほしい。

科目名：疾病論　(看護学科第２学年後期)
履修者数：５９　　配付数：５５　　回収数：５４　　回収率：９８．２％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.5	3.0	4.1	3.6	3.3	3.0	3.6	3.1	3.2	3.9	3.6	3.2	3.8

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

疾病論コーディネーター　**岩　元　　純**

学生のみなさんからの要望でもっとも多かったのが、教科書を指定してくれというものでした。また、スライドのハンドアウトを配布してほしいという要望も多く見られました。学習意欲を刺激するかについての平均点が3．9でもっとも高く、主題あたりの割り当て時間数が適切かどうかの平均得点がもっとも低く3．0でした。評価の平均点が3．4とあまり芳しくはなかったようです。疾病論の教科書については、全分野を網羅する教科書はありませんし、疾病論とかかれた教科書の多くは、残念ながら、これ買ってくださいといういえるものが少ないのが現状です。主題あたりの時間数については、来年のカリキュラム作りに反映させたいと思っています。みなさんの貴重なご意見やご批判を真摯にうけとめて努力しますので、今後ともよろしくご協力お願いします。

科目名：総合臨床医学Ⅰ　(医学科第１学年後期)
履修者数：９３　　配付数：９１　　回収数：９１　　回収率：１００％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	3.4	3.8	3.7	3.6	3.4	3.6	3.4	3.5	3.5	3.7	3.5	3.5

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅰコーディネーター　**千　石　一　雄**

授業評価の評点が平均3.6、総合評価も3.5と可もなく不可もない評価であったことは、学生諸氏が授業の改善を望んでいるものと推測する。具体的には全体の授業構成、各履修主題の授業時間配分の見直し、シラバスの充実が要求されているようである。これらの意見を含め、来年度は学生の視点から見た到達目標を具体的に設定し、より理解しやすい授業が構築されるよう改善を図りたい。特に授業構成、時間配分に関しては新新カリキュラムとの整合性を保ちながら、大幅な見直しが必要であるものと考えている。また、学生評価の問１から問３(あなた自信に対する評価項目)の評価点数が比較的高い結果ではあったが、授業をする側の印象との間に多少差があるようにも感じられる。

科目名：総合臨床医学Ⅱ　(医学科第３学年後期)
履修者数：９３　　配付数：９１　　回収数：８９　　回収率：９７．８％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	3.5	4.0	3.8	3.7	3.5	3.8	3.5	3.6	3.8	3.8	3.4	3.7

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

総合臨床医学Ⅱコーディネーター　**岩　崎　　寛**

総合臨床医学Ⅱは第１内科、第１外科および麻酔蘇生科で構成されている。講義内容は循環器内・外科およびそれにともなう麻酔・全身管理となっている。

学生の評価として、内容における不満というよりは、個々の講義形態および講義内容や講師の変更に関する不満が主なものであると推測された。

今後は、この点での改良が必要であると思われた。

しかし、高い評価を受けている講師も指摘されており、評価されても良い点であると思っている。

科目名：基礎医学Ⅰ　（医学科第２学年後期）
履修者数：１０３　　配付数：１０３　　回収数：１０３　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.3	3.7	4.3	4.4	3.3	3.3	4.1	3.3	3.6	4.2	4.1	3.6	4.0

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

基礎医学Ⅰコーディネーター　**吉　田　成　孝**

カリキュラム改定により従来の解剖学、生理学、生化学と病理学が120コマの大型統合授業科目として展開される事になった科目である。統合の実を挙げるために授業の配置は完全に臓器別の編成とし、試験を１か月毎に行うなどの新たな試みを行った。実際に教壇に立った教官は合わせて16名を数えることから、スムーズな進行ができるか、教官間の意思の疎通や授業間の連携はとれるかなどの若干の心配をしながらのスタートだった。何とか滞りなく半年の授業を終えて、評価結果を見ても一応の合格点に達したのではないだろうか。特に各教官の努力で１コマの授業毎に到達目標を設定した事に対して高い評価を得たと思う。また、頻回評価で学習意欲を高める結果になったことも成功したと考える。ただ、比較的低い評価点となった内容の重複、時間数と授業内容や到達目標との整合性および難易度に関する問題があった事は私たちも認識している。次年度からの課題としたい。

臨地看護学実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　実習用の配付資料を読む等も含め、実習前の予習は十分でしたか。 問２　実習に積極的に参加したと思いますか。 問３　実習への取り組みは学習目標へ到達するための態度として適切なものでしたか。 問４　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
実　習　計　画	問５　事前に実習目標と概要の説明がなされていましたか。 問６　実習はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問７　学生数に対し、指導教官数と実習指導者数は適切でしたか。 問８　指導教官と実習指導者の連携はとれていましたか。
実　習　内　容	問９　これまでの学習内容を活用して実習を展開することができましたか。 問10　受け持ち患者の看護の難易度（コミュニケーションも含めて）は、適切でしたか。 問11　看護過程について、指導教官や実習指導者から明確な助言が得られましたか。 問12　看護技術を実践する機会が多く与えられましたか。 問13　カンファレンスにおいて、看護に関する明確な討議がなされましたか。 問14　実習記録・レポート等の量は適切でしたか。
実　習　環　境	問15　実習場の設備、機材、用具、物品等は必要十分な質と量でしたか。 問16　実習中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問17　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問18　実習は看護の専門性に対する関心や意欲を高めましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：地域看護学実習Ⅱ　(看護学科第４学年後期)
履修者数：６５　　配付数：６２　　回収数：６１　　回収率：９８．４％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.3	4.1	3.8	4.1	4.4	3.4	3.6	3.7	3.5	3.8	2.6	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.0	3.7	3.9	4.0	3.8

＊評価に対するコメント

地域看護学実習Ⅱコーディネーター　**北　村　久美子**

これは、着護学科第４学年後期、最終段階に位置づいた実習についての評価である。この実習は、根室・岩内・千歳・深川・富良野・名寄・上川の各道立保健所で行われたものである。保健所を中心とした地域保健活動に参画し行政的な観点から看護職の役割を理解することを目的としている。学生の公衆衛生行政に対する関心を深め、実習を効果的に行うために、先ず、６月に各保健所実習指導者と教官の会議を開き、保健医療福祉行政の現状につき情報交換を行い実習内容・方法について協議を行った。その後、学生は自分が赴く実習地域に関するアセスメントを行い地域の健康課題について学習し、具体的に地域保健活動参画プログラム(案)を作成し、実習保健所と大学、学生との三者で実習計画を作成している。

学生の自己評価の通り、主体的、積極的に取り組んでおり、概ね行政機関における看護活動に対する関心や意欲を高め、地域包括医療・ケアに関する理解を深めたと思われる。これらは、各保健所の実習指導者を始め関係職種のきめ細かな行き届いたご指導のお陰によるものと感謝している。学生の評価から、看護技術の実践に関する満足度が低かったが、今後、学生の地域における看護技術をどう向上させるかについて検討し、実習の効果を一層高めることが課題であると思われる。

科目名：小児看護学実習Ⅱ　(看護学科第４学年通年)
履修者数：５６　　配付数：５３　　回収数：５２　　回収率：９８．１％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	4.4	4.1	3.8	3.8	4.0	3.3	2.9	3.8	3.7	3.5	3.7	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.9	3.8	3.8	4.0

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅱコーディネーター　**岡　田　洋　子**

小児看護学実習Ⅱの評価に関する感想

Ⅰ．小児看護学における小児看護学実習Ⅱ：

３年次の小児看護学実習Ⅰに続き、４年次の小児看護学実習Ⅱの目的は、小児期の子どもとその家族が抱える健康問題を理解し、健康の回復、保持・増進に必要な基礎的知識・技術・態度を学ぶことを意図している。

Ⅱ．評価に対する感想：

学生自身の自己評価は高く、「実習に積極的に参加したと思うか」の4.4が最も高かった。実習計画では、「実習はスケジュールにそって予定どおり行なわれていたか」の4.0が最も高かった。最も低かったのは「指導教官と実習指導者の連携はとれていたか」の2.9で、３を中心にそれより高く評価した学生と低く評価した学生がほぼ半々である。実習内容では、「カンファランスにおいて、看護に関する明確な討議がなされたか」の4.0が最も高かった。実習環境の評価は.3.8から3.9、総合評価は4.0と高い。

現在小児看護学担当者は、教授１名と助手１名の２名(看護学科開設時３名定員)である。１名不足による学生への影響を考え、小児看護の臨床・教育経験豊かな大学院生をティーチングアシスタントとして半日依頼し乗り切ってきた。この評価に安堵している。学生の実習評価は、病棟(看護師長・臨床指導者)と大学が評価会議を開き一緒に行なっている(15年度:優31名、良14名、可10名、不可１名である)。この評価システムについて、学生への周知が必要である。

科目名：母性看護学実習　（看護学科第４学年通年）
履修者数：５５　　配付数：５３　　回収数：５２　　回収率：９８．１％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.4	4.0	3.5	4.3	4.0	3.9	3.6	3.9	3.9	3.5	3.7	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.8	3.7	3.4	3.5

＊評価に対するコメント

母性看護学実習コーディネーター　**野　村　紀　子**

全体を通して、昨年との大きな差はなかった。ただ、実習内容と実習環境については、指導者が厳しいなどの、少数の意見はあった。病棟の特徴や、入院している対象者の方々の特性が、学生には充分理解されていないように考えられる。ここでの実習は、他の実習とは大きな違いがあり、健康な人々を対象とすることから、学生が入りにくい実習環境であったかもしれない。

問18の看護の専門性に対する関心や意欲を高めたかの設問において、「やや思う」の3.5を維持したことがせめてもの救いである。

科目名：成人看護学実習Ⅰ　（看護学科第４学年通年）
履修者数：５５　　配付数：５３　　回収数：５２　　回収率：９８．１％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.8	4.2	4.1	3.6	3.8	3.9	2.9	3.1	3.6	3.9	3.5	3.8	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.4	3.7	3.7	3.5	3.7

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅰコーディネーター　**野　村　紀　子**

成人看護学実習は、ⅠとⅡに分類され、学生はⅠとⅡをそれぞれ実習している。実習の開始は、成人看護学実習Ⅰからの学生と成人看護学実習Ⅱから開始する学生がいる。成人看護学実習Ⅰの場合は、急性期・周手術期を対象とした患者である。学生にとっては、目標が具体的で学生自身の動きが明確にできる。

このような実習であることから、学生自身も実習を行いやすく、成人看護学実習Ⅱの慢性期にある患者を対象とした実習より充実感が大きかったと考えられる。その証拠として、成人看護学実習Ⅱよりは、全般的に総点が高い傾向がある。成人看護学実習Ⅰにおいて、問17「学生の人権に対する配慮がなされていたか」の項目では、成人看護学実習Ⅱより、0.03の低値を示すのは、実習場所が、それだけ忙しく、仕事の回転の早さを示していると考えられる。しかしながら問18「看護の専門性に対する関心や意欲を高めた」得点が成人看護学実習Ⅱと同じ数値を示したことは、実習としての意味があったと考える。

科目名：成人看護学実習Ⅱ　(看護学科第４学年通年)
履修者数：５５　　配付数：５３　　回収数：５２　　回収率：９８．１

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.6	4.1	4.0	3.7	3.7	4.1	2.8	3.2	3.5	3.8	3.5	3.2	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.8	3.9	3.8	3.7

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅱコーディネーター　**野　村　紀　子**

今回の実習では、４年生としての自立を期待して、また、病棟の工事などもあって、１グループに対し１教官の方法をとらなかった。すなわち、成人看護学実習は、同時に５グループの実習に対し、２教官で実施したことになる。学生数に対して、指導教官と実習指導者数は適切であったか。とした問7の設問に低値を示したことは予想の範囲内と言える。しかし、４年生の実習に１グループに１教官が付くことの是非は検討の余地があると考える。実習内容に関して、問11は、看護課程論に関するものであった。すでに２年生で、看護過程論実習を終了しているにもかかわらず、低値を示すのは、実習による積み重ねが見られないことを意味している。実習内容の各項目の低値は、実習のみに関わるものではなく、それまでの講義や授業による影響が大きいことが示唆されている。

今後の授業・演習の工夫が急がれると考えられる。

科目名：地域看護学実習Ⅰ　(看護学科第３学年後期)
履修者数：６３　　配付数：５３　　回収数：５２　　回収率：９８．１％

＊評価結果　(平均)

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	4.2	4.0	3.6	3.8	4.0	2.9	3.0	3.5	3.5	3.6	2.9	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.6	3.7	3.7	3.8

＊評価に対するコメント

地域看護学実習Ⅰコーディネーター　**北　村　久美子**

看護学科３学年後期に位置づく実習は、地域で生活する個人・家族・集団そして地域全体を看護の対象として捉え、対象のニーズに合わせた地域保健・看護を実践できる基礎的能力を養うことを目的にしている。実習は、10月、11月にわたり市町村役場、訪問看護ステーションでそれぞれ１週間ずつ行った。市町村役場の実習は、従来からお世話になっている上川保健所管内の町役場(東川町、東神楽町、比布町、鷹栖町)と今年度はじめての上富良野町と和寒町の６町で行った。また、訪問看護ステーションの実習は、旭川市内にある北海道総合在宅ケア事業団所属の１施設と病院併設の５施設で行った。今回の評価から学生は、主体的、積極的に実際に取り組んでおり、概ね学生達は地域看護の専門性に対する関心や意欲を高め地域保健・看護活動について理解を深めたものと思われる。これらは、学生自身が初めて体験する生活環境、人間関係の中で努力して実習に取り組んだ成果と思われる。また、各町、施設の実習指導者のきめ細かなご指導のお陰によるものと感謝している。

学生の評価から、まだまだ改善点があると受け止め、より有意義で効果的な実習になるよう努力してゆきたい。

体育実技企画に対する学生評価

あなた自身について	問１　授業に積極的に参加したと思いますか。 問２　授業への取り組みは学習目標へ到達を目指す態度として適切なものでしたか。 問３　履修要項に記載されている履修の目的は達成されましたか。
授　業　計　画	問４　授業はスケジュールに沿って予定どおり行われていましたか。 問５　学生数に対し、指導教官数は適切でしたか。 問６　指導教官間の連携は機能していましたか。
授　業　内　容	問７　事前指導は、実技を行う上で役立つ内容でしたか。 問８　授業によって課題の要点を理解し、基礎的な技術を習得できましたか。 問９　授業内容の難易度は適切でしたか。
授　業　環　境	問10　授業用の設備、機材、用具等は必要十分な性能と量でしたか。 問11　授業中の安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問12　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総　合　評　価	問13　この授業は価値のある内容と思われましたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科目名：体育実技　（選択科目通年）
履修者数：４１　　配付数：３９　　回収数：３９　　回収率：１００％

＊評価結果　（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.7	4.6	4.1	3.9	3.9	4.2	3.8	3.9	4.2	4.1	4.2	4.2	4.4

問14	問15	問16	問17	問18

＊評価に対するコメント

非常勤講師　杉　山　喜　一

ガイダンスでは、運動処方やスポーツの生理学的な効用について説明すると共に、その実践活動として、体力作りやコンディショニングの他に、バレーボール、サッカー、テニス等の球技やバドミントンを中心とするスポーツ活動を実施した。学生自身の健康に対する意識や身体を動かすことへの欲求が高かったこともあり、ほとんどの受講生は、授業に対して非常に熱心に取り組んでくれた。また授業態度もまじめで、活動準備の際にも協力的であった。今回の調査結果では、全体的の平均値が4.2、多くの項目で４以上の評価が得られた。学生のコメントを眺める限り、学生の要求をある程度満たすものであったといえるが、選択によるスポーツ種目に関しては制限があり、必ずしもすべての学生のニーズに応えるものではなかった。なお例年のことではあるが、本講義が、講義・実技で45時間の内容で構成されているにもかかわらず、何故１単位しかもらえないのかといった不満も多くの学生からきかれた。今後は、授業の中に様々な講義題目を加えることで、講義と実技をセットにした２単位化についてあらためて検討していただければ幸いである。

学生団体一覧

平成16年度承認された学生団体は以下のとおりです。

【体　育　系】

	団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考		団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考
1	ラグビー部	38	医4	井田　英臣	原渕　保明	継続	22	女子バスケットボール部	13	医4	渋谷　英子	千葉　茂	継続
2	準硬式野球部	29	医4	遠藤　哲史	吉田　晃敏	〃	23	ソフトボール同好会	18	医2	新　みゆき	近藤　均	〃
3	卓球部	30	医5	外崎　登一	谷口　成実	〃	24	マラソンクラブ	3	医4	野崎　綾子	鈴木　裕	〃
4	陸上競技部	19	医4	榊原　学	鈴木　裕	〃	25	女子バレーボール部	22	医4	遠藤　寿子	谷本　光穂	〃
5	競技スキー部	26	医4	畑中　憲行	小川　勝洋	〃	26	アイスホッケー部	22	医3	佐藤　剛	松野　丈夫	〃
6	ゴルフ部	35	医3	野中　穂高	紀野　修一	〃	27	男子ハンドボール部	21	医4	山崎　和正	上口勇次郎	〃
7	硬式庭球部	34	医4	津野　宏隆	田中　達也	〃	28	カヌー部	6	医6	古川　健太	宮本　和俊	〃
8	バドミントン部	51	医4	瀬野尾智哉	川村祐一郎	〃	29	ビリヤード研究会	29	医4	大野　晋治	上口勇次郎	〃
9	男子バスケットボール部	23	医4	藤田　智之	千葉　茂	〃	30	女子ハンドボール部	28	看3	大谷　佳子	上口勇次郎	〃
10	空手道部	14	医3	勝俣　博史	相澤　仁志	〃	31	ピクニック同好会	12	医2	島田　岳洋	近藤　均	〃
11	サッカー部	33	医4	松原　新史	菊池健次郎	〃	32	トライアスロン部	39	医4	佐藤　和生	本間　龍也	〃
12	男子バレーボール部	21	医4	柴田　宏明	東　信良	〃	33	インラインホッケー部	24	医3	長沼　英和	松野　丈夫	〃
13	剣道部	20	医4	大谷　真一	平野　史倫	〃	34	スキューバ・ダイビング部	7	医4	岡本　修平	林　要喜知	〃
14	山岳部	14	医4	阿部　克哉	佐藤　啓介	〃	35	草野球同好会	26	医3	飴村　光	林　要喜知	〃
15	弓道部	29	医4	松本　森作	吉田　逸朗	〃	36	HMS～総合格闘技同好会～	30	医4	豊島　邦義	小川　勝洋	〃
16	ワンダーフォーゲル部	20	医4	武内慎太郎	山内　一也	〃	37	ボーリング同好会	15	医4	山川　純一	廣岡　憲造	〃
17	大東流合気道部	17	医3	三堂　理恵	林　要喜知	〃	38	ツーリング同好会	15	医2	猪子　和穂	小川　勝洋	〃
18	ソフトテニス部	58	医4	小玉　勇士	小野寺一彦	〃	39	ばすけ同好会	12	医2	岩永　航	林　要喜知	〃
19	水泳部	47	医4	大沢絵都子	羽田　勝計	〃	40	乗馬クラブ	5	医3	平　沙代子	金子　茂男	新規
20	基礎スキー部"SNOW INJECTION"	45	医3	平井　俊浩	油野　民雄	〃	41	釣同好会	19	医4	佐藤　和生	山内　一也	〃
21	サイクリングクラブ"ちゃりんご"の会	11	医2	佐藤　雅之	山崎　浩	〃		４１団体	980				

【文　化　系】

	団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考		団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考
1	写真部	14	医2	四枚田耕平	谷本　光穂	継続	17	熱帯医学研究会	7	医5	久保　寛	伊藤　亮	継続
2	医療研究会	17	医3	風林　佳大	宮本　和俊	〃	18	モルツの会	26	医6	佐藤　陽子	平　義樹	〃
3	茶道部	20	看3	作田　好	坂本　尚志	〃	19	かるた会	5	医2	田原　大地	松岡　悦子	〃
4	将棋部	13	医3	二村　麻美	上口勇次郎	〃	20	国際保健医療研究会	6	医4	髙田　幸子	吉田　貴彦	〃
5	JAZZ研究会	11	医2	四枚田耕平	佐賀　祐司	〃	21	シネマ同好会	22	医4	師尾　典子	渡部　剛	〃
6	ギター部	20	医3	川井えりか	林　要喜知	〃	22	盆栽部	35	医3	上森　元気	布村　明彦	〃
7	ロック研究会	34	医3	熊井　琢美	吉田　成孝	〃	23	民族文化研究会	35	医3	政田　賢治	吉田　成孝	〃
8	聖書研究会	8	医5	花香　真宣	内藤　永	〃	24	道の駅研究会	28	医3	芹川　真哉	林　要喜知	〃
9	プラスアンサンブル	27	医3	石川　晶	髙井　章	〃	25	図書館部	12	医2	田中　緑	近藤　均	〃
10	室内合奏団	34	医4	西　真智子	髙井　章	〃	26	ＥＳＳ	9	医4	野村　務	BAYLEY, Simon	新規
11	旅芸人倶楽部	38	医2	吉野　謙輔	原渕　保明	〃	27	ＭＡＫ	27	医3	山本　昌代	髙井　章	〃
12	合唱部	51	医3	森本　美仁	小川　勝洋	〃	28	温泉研究会	30	医2	坂谷　慧	谷口　成実	〃
13	旅と鉄道研究会	9	医5	市來　一彦	平　義樹	〃	29	文芸部	5	医4	西澤　千津	近藤　均	〃
14	美術部	5	医5	梅村真知子	大日向　浩	〃	30	形態学研究会	4	医5	暮地本宙己	渡部　剛	〃
15	華道部	13	医3	川井えりか	中村　正雄	〃		３０団体	575				
16	AMC2（エイエムシースクウェア）	10	医2	知久才穂子	橋本　眞明	〃							

新入生合同研修会実施される

今年は新入生の研修が，医学科・看護学科合同で４月19日（月），20日（火）の２日間にわたり，本学にて行われました。

４月19日（月）の９時から看護学科棟大講義室にてグループごとに着席し、塩野副学長の挨拶に始まり、学年担当の化学中村教授からオリエンテーションを受けた後、医学科そして看護学科は場所を変えて、ともに今後の学習展望及び医療従事者としての心構えの説明を受けました。

午後からは、班に分かれ救急蘇生実習及び手話の演習を受け、医療現場の雰囲気を感じたところで１日目は終了しました。

４月20日（火）は、「主体的学習への取り組み方について」又は「どのような医療従事者を目指したいか」という課題についてのグループ討論とその発表会から始まりました。

最初は新入生ということで慣れないなか、ぎこちない点も見られたが、やがてうち解けあうと討議も真剣さを増し次第に白熱し、また、発表するにあたり、流暢なスピーチをこなし聴衆をうならせる者や、イラストなどに隠れた才能を発揮する者がいるなど、意外な一面もかいま見られました。

午後からは、「若者を狙う悪質商法」、「健康を考える医学生らしい生活習慣のすすめ」、「ＨＩＶ感染の現状と課題について」、「アルコールとの正しいつきあい方」と今後の学生生活の指針となるべき講演を受けました。

平成15年度　学位記授与式

平成15年度学位記授与式が３月25日（木）10時30分から本学体育館において挙行されました。

式では荘厳な雰囲気のもと、本学室内合奏団が奏でる調べのなか、医学科108名，看護学科66名、合わせて174名の卒業生一人ひとりに学士学位記が、博士修了者19名に博士学位記が、修士修了者７名に修士学位記が、一人ひとりに手渡されました。

ついで、学長から卒業にあたり、式辞が述べられました。　（学生課）

平成16年度　入学式

医学科・看護学科の入学式が４月９日（金）10時から本学体育館において挙行されました。

式では、医学科90名、看護学科60名、看護学科第３学年編入生10名、合わせて160名の新入生を代表して医学科　青沼達也くんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに、大学生活の第一歩を踏み出しました。

（学生課）

第46回東日本医科学生総合体育大会

第46回東日本医科学生総合体育大会（冬季大会スキー部門）が３月14日（日）～３月20日（土）に秋田県田沢湖スキー場にて開催されました。

男　子	アルペン	スーパー大回転	畑　中　憲　行	優　勝
	大回転		畑　中　憲　行	準優勝
	距　離	リレーＡ戦　５km×４	旭川医科大学Ａ	３　位
		リレーＢ戦　４km×４	旭川医科大学Ｂ	３　位
女　子	アルペン	スーパー大回転	矢　野　絢　子	準優勝
	大回転		矢　野　絢　子	優　勝
	回　転		矢　野　絢　子	３　位
	距　離	５km（フリー）	小　林　智　絵	優　勝
			筌　場　友佳代	準優勝
			金　田　宜　子	準優勝
		３km（フリー）	小　林　智　絵	優　勝
			筌　場　友佳代	準優勝
			金　田　宜　子	３　位
	スプリント決勝		知　久　才穂子	３　位
	リレーＡ戦		旭川医科大学Ａ	優　勝
	リレーＢ戦		旭川医科大学Ｂ	優　勝

以上のようなすばらしい成績をあげ、冬季スキー部門は男女とも総合優勝しました。
この結果、夏冬合わせての総合成績は、

男女部門　**優　勝**　旭川医科大学　　**準優勝**　東北大学医学部・筑波大学医学専門学群
女子部門　**優　勝**　東京女子医科大学　　**準優勝**　旭川医科大学　**３　位**　山形大学医学部

となりました。今後ますますのご活躍を期待します。

第47回東日本医科学生総合体育大会

第47回東日本医科学生総合体育大会（夏季大会）は本学が主管校となって下記の日程で実施されます。優勝の栄冠を目指して頑張る旭医大生へ烈夏のもと熱い声援を!!

競技種目	競技会場	7月				8月															
		28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
ソフトテニス	風越公園テニスコート				準						予									
ゴルフ	札幌北広島プリンスゴルフ場				準		準,練													
バドミントン	旭川市総合体育館				準															
	旭川大雪アリーナ				準															
空手道	北海道立野幌総合運動公園総合体育館										準,練									
柔道	北海道立総合体育センター（きたえーる）														準					
ラグビー	野幌運動公園ラグビー場						予		予			予			予					
陸上	厚別公園陸上競技場										練									
水泳	札幌市平岸市民プール						準,練													
準硬式野球	札幌市営円山球場																			
	札幌市営麻生球場																			
	北海道立野幌総合運動公園硬式野球場									予										
	北海道立野幌総合運動公園軟式野球場							予												
	石狩市営青葉球場							予												
	北広島市営緑葉公園野球場								予											
弓道	北海道立総合体育センター（きたえーる）							準												
バレーボール	北海道立総合体育センター（きたえーる）																			
	北海道立真駒内公園屋内競技場																			
バスケットボール	札幌市美香保体育館							準												
	札幌市北区体育館							準												
ハンドボール	札幌市豊平区体育館																			
サッカー	ニセコサッカーヴィレッジ								準,練											
ボート	茨戸川ボートコース																			
卓球	八戸市体育館									準										
剣道	青森県武道館														準					
テニス	東照館テニスコート				準							予								
硬式野球（順天堂大）	太田スタジアム																			
	等々力緑地硬式野球場								予											
	県立相模原球場								予											
	佐倉市岩名球場													予						
馬術（東京女子医大）	八王子乗馬倶楽部					準			予											
ヨット（千葉大）	江ノ島ヨットハーバー	練					予													

（準：準備日、予：予備日、練：練習日）

春の叙勲に本学から

このたび、本学名誉教授で平成３年から９年までの２期６年間旭川医科大学学長を務められました清水哲也先生が今年度春の叙勲で瑞宝重光章を受章されました。

これは長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し授与されたものです。

（学生課）

教員の異動

採　用	H16. 3. 16	看護学講座	講　師	藤井　智子
退　職	H16. 3. 31	歯科口腔外科学講座	教　授	北　　進一
辞　職	H16. 3. 31	英語	助教授	室松　慶子
〃	H16. 3. 31	眼科学講座	講　師	引地　泰一
昇　任	H16. 4. 1	外科学第二講座	助教授	河野　　透
〃	H16. 4. 1	眼科学講座	助教授	石子　智士
〃	H16. 4. 1	眼科学講座	講　師	安孫子　徹
採　用	H16. 4. 1	看護学講座	講　師	阿部　修子
転　出	H16. 4. 1	看護学講座	教　授	良村　貞子
配置換	H16. 4. 1	入学センター	教　授	坂本　尚志
〃	H16. 4. 1	入学センター	助教授	大谷　　奨
昇　任	H16. 6. 1	保健管理センター	助教授	川村祐一郎

窓　外

数　学　教授
山内　一也

窓外を眺める

この時期の（５月中頃）旭川はぼんやりと窓外を眺めるのにはもっとも良い季節だと思う。小生の研究室は4階なので眼下に目をやると、このときとばかりに咲き乱れる真っ白なこぶしの花、わが世の春来たれりと芝生一面を黄色く染めてその存在を主張するタンポポ、恥らいながらも出生の喜びを隠し切れないといった風情で木々の枝を覆いつくす薄緑の若葉、少し遠くに目をやるとピンクの花が一段と眩しい桜の花、まさに春到来を実感させる風景である。そして遠くには、その頂に白と黒の絶妙のコントラストを見せながら紺碧の大空の中に威風堂々と存在している大雪連山、十勝連山の山々、何年見てもこの景色は飽きない。これだけのスケールは日本国中にもそうざらにはないように思う。

「大空に白く輝く大雪の雄雄しき峰々君に見せなむ」

この連山の遥か遠くには洋々と広がる真っ青なオホーツクの大海原があるのだ。沖合いに出た釣り船からみる北海道は霞んだなかに平たく広がっている。青い海、青い空、ベタ凪の海に釣り糸を垂れ至福の時を過ごしている小生の姿が浮かんでくる。アムール川の養分をたっぷりと吸い込んだ流氷のおかげでオホーツクの鰈はまるまると太っている。真っ白な腹部の下方を薄い黄色で染め、身を捩じらせながら上がって来る真鰈の引き味は抜群だ。口の中でふわっと身がくだける新鮮な真鰈の煮付けは絶品である。煮過ぎてはいけない。さっと湯をかけ氷水に浸し６、７分煮る。（隠し包丁を入れても良い）これ以上煮ては身が硬くなる。身の硬い鰈の煮付けはいただけない。

「窓外の彼方広がる春の海釣り糸垂れてなに想う」

窓外は原稿を書くよりも眺めるのが良い。